
解散部 The dissolution

扉。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

解散部 The dissolution

【Nコード】

N8983V

【作者名】

扉。

【あらすじ】

不幸歴 10年以上。主人公 蘭 颯は不幸体質だった。しかし、転機というものは突然現れる。

高校2年 なんでも解決 即日解散 入解金無料（解の字ち（ry という張り紙を見つける。 その部活にいたのは主人公と匹敵する残念な人達だった。 学園 ラブコメ 笑い あり！！！！ 一度見たらやめられない とまらない（ry かつぱえびせんかつ！！

10/18 タイトル変更

ああ、不幸だ（前書き）

パツと思いついてササツと書きました。

読んでいただけると光栄です。

ああ、不幸だ

俺の名前は蘭おいらん 颯ハヤテ

吸血鬼でもなければ、超スパー執事でもない。ただの人
ただし、普通の人とは違う。

そう、俺は 不幸体質なのだ。

別に髪の毛がツンツンしていて『イマジンなんちゃら』と叫んだら
幻想が消えるわけでもない。

そう、ただただ不幸なだけだ。

まず、これを見ている人に質問をしよう。

Q) 何度、ひかれた事がある？

いや、別に変な事を言って友達にひかれたとかそういう事ではない。
車にひかれたことはあるかと聞くのが正しい。

普通に暮らしている分なら絶対に在りえないだろう。
でも、俺にはあるのだ。

A) 俺はこの16年生きてきて10回ひかれている。
ほぼ毎年だ。

別にひかれたくて道路で横になってしているわけではない。そんなバカ
はいないだろう

ただ、普通に歩いているだけでひかれる。

友達と隣同士で歩いていても友達がふと靴ひもを結ぼうとした時、
気が緩むのかな

ひかれる。

Q) さらに質問。 なんと誘拐されたことがある？

普通に暮らしていれば、誘拐なんぞアニメや小説の中だけだと思うだろう。

しかし、俺はある。 よく間違えられる。

間違えられるだけならいいけど、消されかけたことも何回がある。

A) ちなみに4回だ

まあ、他にも言いたいことはたくさんあるけど今日はこの辺で
そして、俺の高校2年生 high school lifeの2
年目に突入したある日。

「不幸だ」

その言葉が今日の俺の初めて発した言葉。

ちなみにこの言葉が最初に出る日を数えてカレンダーに赤く色をつけたら

恐らく、カレンダーは血の海と化すだろう。

ちなみに、今なぜ不幸だと言ったのかというと……

幼なじみと言うより腐れ縁？ あれ、腐っちゃっているけどいいの？

そんな存在の瑞希こと成澤 瑞希だ。

何故、幼なじみが居て不幸になるのか？

朝、起こしに来るなんてギャルゲーか！！ 羨ましいぞ変われ！！

って人がいるかもしれない。
いや、いて欲しい。 変われるなら変わって欲しいです。
この状況。

ベットで寝ているのに、両手がガムテープでぐるぐる巻き両足も何かで縛ってある。

最初この状況になった時、 『……………ん？ はっ！！ 金縛り』と驚いた。

「あ……………あのー瑞希さん？」

「はい 何かな？ 颯くん」

ニコツとキラツと効果音が付きそうなくらい、いい笑顔でした。
って、そんな状況じゃねえええええええ

何回やれば気が済むんだあああああ。 今日で何回目だよ、もうカレンダー血の海だよ。

はあ、とため息をつく。 もう、諦めました。 きっと100回はこんな状況に立たされています。

何故、親に助けを呼ばないかというと、父親は数年前に病気で他界。母は持ち前のポジティブ思考でとある会社の社長をしている。
すなわち、誰も助けには来ないと言っわけだ（笑）

ちなみに、去年のいつしか母が休みの時、このような時に母が入ってきて

「あら 頑張って頂戴ね。 瑞希ちゃん」

と、言ってゆっくりとドアを閉めた。

この薄情者おおおと言って叫んだ記憶が昨日のように脳裏にあるぜ！

さて、ようやく原稿用紙3枚程度になってきました。

これなら今日一日だけで原稿用100枚いけんじゃね？と思ってしまいます（嘘w）

さて、今はこの状況を脱却しなくては……………

「あの、瑞希さん・そのそろど『はあゝ 颯くんの匂いだゝ』さい」
ああ 匂い嗅がれちゃっているよ。どんな匂いだよって言いたくなるけど言ってはダメだ。

K O R O S A R E R U

前に言ったことがある。『止める』と大きな声で、そしたらわんわん泣き出すわ
台所から包丁持ってくるわ。最後には『颯くんを殺して私も死ぬー』だから

もう、本当にあの時は死ぬかと思った。

「もうダメだ……………」

諦めて寝ようかな………… うん。そうしよう！！

「なあ、瑞希？」

「ん、なあにいゝ」

相変わらず僕の腹の辺りをもふもふとしている。少しこそばゆいぞ、

コノヤロー

「俺、寝るから どいてくれない？」

「モフモフ」

「すいませーん」

「なら、私が隣で寝てあげるよっ」

「いや、いいでゝ」

言い掛けた、危ない。危うく死ぬところだった。

すると、ゆっくりとばれない様に瑞希は布団に入ってくる。

いや！！！！ ばれてるよ

「……………んな！！ 入るなって、狭いだろ」

「んゝ 颯くんの匂いゝ」

どれだけ匂い好きっ！！！！！！ 匂いフェチかお前は！！！！

！！！！！！！！

「はぁ もうどうにでもなれや」

そして俺は目を瞑った。

その後、何をされたのかは覚えていない。

目が覚めると、昼だった。

ちなみに今日は土曜日です。だから寝たんだよ、俺はまじめな高校生だからねっ！

隣を見ると…………… 瑞希の寝顔がドアップで映った。

うわぁ 恥ずかしい！！ しかも、縛られておるから身動きが取れない。

なんか、足の辺絡まっとるし どうしよー

なんて、思っとりません。何回こんな境遇に会ったと思っているんですか

10回はねられているんですよ、学習してます。

コキッ

俺は手の間接を外した。

そして、すり抜けて足のひもを外す。

布団からコロコロと転がって地面に叩きつけられる。

脱出成功 シ

ワー 俺にはわかる。 みんなの歓声が笑い声が

そして、こつそりと瑞希にはれない様に部屋を出る。
もちろん着替えの為だ。何時間もこの服でいるはずがない。
まあ、瑞希が来ない休日はこのままだけど。
少し匂うからあいつずっと嗅いでくるんだよね。萎え。
風呂場の前の洗面所で鏡を前にし、着替える。
はあ、俺も大人になったのかあ

俺が見ている先には自分の体。
引き締まった筋肉に腹には無数の手術痕が残っている。
顔の所にも少し、傷痕がある。
そんなことを思いながら着替えていき、最後に

「やっぱ もうちょい染めた方がいいよな」
襟足を触って言う。

ちなみに、襟足とは後ろ髪の毛の所でバサアとなっている所。
俺の襟足は白色で染まっている。ってか染めた。
そんなことを思いながら、洗面所を出た。

ああ、不幸だ（後書き）

感想を待っています。

きっと、来ることを……。

幼なじみ（前書き）

感想募集中。

幼なじみ

世間一般から言うと『幼なじみって超いいよね』とか

『やっぱ、最終的には結婚でしょ』とか 色々ある。

そりゃー 俺も昔は好きだった。 今も好きかと言われるとちよつとわからない。

怖いもんなぁー 瑞希は…………。

でも、あんな行動を取るの俺だけらしい（瑞希の友達調べ）

あいつは学校では………… つか人前では学業人物共に優秀であり先生からの評判もいい。

瑞希の友達からすると『瑞希はいい人なんだけど、あんたが他の女子と話していると言動が怖いのよねえ』だそうだ。 ちなみにあんたとは俺。

結局、どうにも変わらない。 俺にとってプラスではないことは8割『不幸だ』の分類に入ってしまう。

それと、もう一つ 瑞希には俺と同じく残念な所がある。それは、ヤンというやつだ。

ヤンデレ

キャラクターの形容語の1つ。「病み」と「デレ」の合成語であり、広義には精神的に病んだ状態にありつつ他のキャラクターに愛情を表現する様子を指す。

一方、狭義では好意を持ったキャラクター「デレ」が、その好意が強すぎるあまり

次第に精神的に病んだ状態になることを指す。 『ウィキ調べ』

その通りだと言っしかない。

前に瑞希とケンカしたことがあった。

その時は、酷かった。

言いたくもない。

女子と話してた時も発動した。

言いたくもない。

そんなこんなで幼なじみとは結局 仲のいい腐れ縁と言っわけなの
である。

時間は遡って 少し前。

俺が部屋を出た 少し後の話。 瑞希視点と言っわけ。

瑞希 side

「はう」

やっぱり颯くんの匂いはいい匂いだよ

別に私が匂いフェチとかではない。

好きな匂いは颯くんの物限定なのだ！

目を覚ましたら何時の間にか颯くんはいないし、せめて服だけは置
いていつ（殴

すいません。もうすこしで変態になる所でした。

まあ、いいもん布団があるから 颯くんの匂いが香しいもん。
モフモフ モフモフ モフモフ モフモフ

.....はっ！！

いつの間にか読者放りっぱなしになっていた。

これは大変だ。このままでは颯くんのいい匂いを全国に広められない。

こうなったら。

「はい、そこまでー」

あ、颯くんだ。と、いうことで今日の瑞希ちゃんはおしまい。
バイバイ。

颯 side

「はい、そこまでー」

俺は部屋に入ってしよっぱなの言葉だった。

何故かと言うと、瑞希が俺の布団をエンドレスで嗅いでいるからだ。
どんだけ匂いフェチっ！！と、言ってしまう。

俺は瑞希から布団を引っぺがし布団を干す為にベランダへ出る。

「不幸だ。こんな時には布団を干してっど……」

まさしく、『イマジンなんちゃら』の第1話である。

そこには銀髪のシスターはいない。いるはずもない。ここは普通の家だ。

なんちゃら都市でもない。

「はーやてくん」

きゃっ／＼と言つ言葉が聞こえ、瑞希が後ろから抱きついてくる。

「あ……あぶねえって」

「えへへ」

布団を持つている為、うまくバランスが取れない。

俺はそのままベランダから落ちた。

ドスッ

痛い。特に腰が ぎっくり腰？

肩も痛い 四十肩？

「大丈夫 颯くん？」

ベランダから瑞希が顔をだして覗いてくる。

ちなみに俺の部屋は2階で下は庭になっているので対してダメージはない。

「大丈夫だ、気にすんな」

俺は瑞希を心配させないように手を振ってアピールする。
すると、瑞希は安心した様子で部屋に入って行った。

それから俺は布団を担いで、部屋まで戻った。

時は夕暮れ。 日は19時 P m 7:00である。

俺は夕ご飯の準備を瑞希はそこら辺できよろきよろとしていた。
ちなみに、おれは小さい頃から料理をしている為普通の奥さん並みに上手い。

まあ、いまだに母と亡くなった父それと瑞希にしか食べさせことないけど

「瑞希、お前食べてくか？」

「うん、食べていくさー」

お前は沖縄の人か！！

料理は完成、ちなみに今日はカレー

べ、べつに手抜きをしたんじゃないんだからねっ！！

それから2人で晩御飯を食べ

瑞希は一緒にお風呂に入ろうと興奮した状態で言ってきたので追いついた。

普通逆じゃね？　まあ、逆でもないけど。

俺は風呂から上がると、毎度の如く瑞希からのメール故に54件それも、1分置きとか……怖い。　ストーリーかあいつは！！！

俺は最後のきたメールに『そうですね。それではおやすみ』と返信をして

ベットのの上に投げた。

明日は日曜だから寝てよ。

そして、月曜からまた憂鬱な学校が始まる。

早く不幸体質を直したい………　ってか10年以上も一緒だから離れないとか言うオチは止めてください。

マジで勘弁です。

そう思いながら、俺は部屋の電気を消した。

とある日の不幸！？（前書き）

感想募集中。

とある日の不幸！？

週明け月曜日

毎日の如く 瑞希により起こされたたいな不幸を感じる。

ご飯を食らいざ登校。

登校中に犬に追いかけれ全力疾走 その後、教室に着くまで瑞希に抱きつかれ

男子に『殺すぞ』と言わんばかりの目で見られる。

「ああ、不幸だ」

「その口癖直らないね」

「ああ、恋か」

「だから僕は恋じゃなくて恋だつてば」

「いや、文字だとわからんから」

ちなみに、『れん』ではない『こい』だと言っております。

こいつは、ふじわら藤原 こい恋

俺と瑞希と恋で小 中 高と同じである。

ちなみに、女の子。

でも、こいつだけは話していても瑞希はキレない……………何故？

「でも、相変わらず不幸だよな」

「マジでまた憑いてんの？取ってくれよ」

「いいよ……………はい、取ったよ」

「ありがとな」

ちなみに、恋は靈感バリバリある子で幽霊と話せるらしい。
ある意味、残念。

「まあ、でも毎日憑いている人なんてある意味珍しいよね」

「それを本人に言うな、若干傷つくだろ」

「あはは、それもそうだね」

すると、他の女子からの誘いにより恋　l o g　o u t

ああ　それにしても平和つていいよな……………。

ふと、窓側を見ると　瑞希に劣らない黒髪の可愛い子がいた。
2年になつてはや数日だが、初めて見た気がする。

それに、近くにいる金髪の奴が一方的に話している。

無視されてんのあれ？

まあ、いいや。どうでも……………。

俺はそんなことを思いながら、1時間目の授業の準備を始めた。

話は飛んで放課後。

そろそろ帰るかなと言うタイミングで瑞希の登場。

ちなみにクラスはお隣のB組です。

「颯くん、帰りましょ」

「……………ん　ああ」

カバンを持ち、教室を出る。毎度のことなどでもう慣れたのだが男子の目が痛い。

そして廊下。

周りは部活勧誘をしている。大変だなあ　ちなみに俺は帰宅部

「私も帰宅部」

「いや、モノローグに入ってくんなよ」

そんなわけで早く帰れるのだが……………一瞬、見てはいけない物

を見てしまった。

こんなポスター

『なんでも解決 即日解散 入解金無料（解の字ち（ry
ぜひ君も『解散部』へ入ろう』と言うポスター

こ、これはあれだな。隣人部的なやつか自演乙みたいな部活だろう
なと思つても見る。

しかし、なんでも解決と言う響はいい。
もしかしたら、もしかしたら1%希望があるかもしれない。
よし、なんとかは吉日だ！！ 行ってみよう。

「あ、瑞希？」

「ん なぬでしょうか」
なぬってなんだよ。なぬって

「ちょっと、俺用あつたから先帰ってくれ」
そういつて俺は超スピードでその場を去った。

場所はたし……か……、あつた。ここだ。

『解散部』とプレートがあつた。
しかし、それは紙で貼ったもので下には「第2娯楽室」と書かれて
あつた。

え……なに、娯楽室って 超初耳！！ しかも、第2つてじゃあ
第1あるんかいっ！！

………思わずツツコンでしまった。俺はツツコミではないのに………

ボケでもない。

まあとにかくはいつて……
俺はドアを開きながら……

「あ、いらつs『ガチャ』」
うん、何も見なかった。うぬ、なぬもみなかったぞ。
同じクラスの金髪の奴がいたけど見なかったぞ……。

「なんで閉めるん『つとう』」
ドアを開けた金髪少年の言葉を聞かず俺は全力で走った。
まさしく、全力少年。

走る 走るけど……。

「ねえ 待つてよー」
金髪少年が隣にいる。

なに！？ 俺の全力だぞ 昔は将来ボルトになれるねと言われるくらい凄かったんだぞ！！

「にゅおっ！……！」

金髪少年は叫んで、俺の上すなわち空中に飛び俺の前へと着地する。
「スタツ どうたい！！ 聞こえるよ。僕い向ける歓声があああ」
あれ、この言葉どこかで聞いたことあるぞ？ まあいいや。
それより……今のこの状況を打開しないと

「ちょい 待ち……！ 君、蘭 颯くんでしょ」
！？ もうばれてる。まあ、同じクラスだからしょうがないけど。
「君つてさ、もしかして残念な子？」

………あにゅ？？ 今なんと？？

「……………」

「ああ、紹介が遅れたね。僕は2 A組 練馬^{ねりま} 炬^{かがり} 練馬は練馬区

炬は……まあいいや」

頭を掻いてあははを誤魔化す金髪少年。

「で、もう一度聞こう。君は残念な子かい？」

「……まあ、残念と言われれば残念だけど」

俺がそういうと、金髪少年はニコツと笑みを浮かべ

「では、我が『解散部』への入部が認められますなあ」

…………… Why?????

「まあ 詳しいことは部室で」

そういい、俺は金髪少年に部室へと連れてかれた。

なんか、とても残念オーラしか見えないんですけどw

そして再び『解散部』へお舞い戻ってきた俺はこの一歩は言ったらもう戻ってこれないよ
って所までやってきた。

「さあ 速く入った入った」

ドンツ と押され入ってしまった。

もう2度と戻れない（泣

「炬 来てたの……………誰だそいつ？」

「ああ、こいつは蘭 颯くん ウチのクラスだけど覚えてない？」

「覚えてないな、自分のクラスはお前しか知らないからな」

あ…………この人 窓側にいた黒髪の少女やん。

「…………ぬ どうした。あららぎ」

「いや、『ら』1個多いですし。なんかパクリな気がします」
「やっぱり見た目はキレイだ。 和風のお嬢様みないな。」

「…………な、なんだ。そんなに人の顔を見て 殴りたいのか!」
「…………いや、すいません。綺麗だったもんで……」

「ん!?! ……………なら。許す」

ん? 何故、照れた?

「そついえば、まだ君の残念を教えてもらってなかったね」
金髪少年が後ろからそついった。

「ちなみに、僕の残念はバカな所さ」

キラッと擬音語が付きそうなくらいのいい笑顔。
こいつ、よく見るとカッコいいな。

「炬は、養子も性格も運動神経もいいがとにかくバカだ!」
ソファ―で本を読みながら、黒髪少女はいった。

…………そついえば、なんかバカっぽい。

「で、黒髪少女さんはどこら辺が残念なんですか?」

「黒か…………私のことか」

「ええ」

「私は日笠 ひがさ 夜 よる だ」

「では、日笠さんはどの辺が残念で?」

「それは……………」

口を拭って言うのを止めた。

本を高速で読んでいる。早っ!!

「夜の残念は性格だす」

「…バツ……それをいうなああああ」

金髪少年の言動にキレた日笠さんは本を無数に投げてる。

「おっと で、颯くんの残念は？」

本をつまく避けながら言ってくる。うわぁースゲー運動神経。

ドスッ 金髪少年から結構離れているのに本をもろに顔に当たった。

「これです……」

落ちた本を拾い、日笠さんに返す

「う……悪かったな」

「いえ、慣れてるし いいですよ」

「……………」

金髪少年は考えている。

「……」

何か分かったようだ。

「物を引き寄せる能力」

「俺はどこかの禁書目録か……」

……………沈黙。

「流石だ、炬のボケってか素だけだな……ッッコむとわ」

「ね、颯くん。いるでしょ ウチの部活に」

すると、日笠さんは俺の目の前まで近づいて来て

「お前不幸体質だつてな」

「！？ 何故それを……」

「ある人から聞いた」

どの人だ……！！

ピシッと俺に向かって指を差し
「解散部への入部を許可する」

ああ、また不幸なことが起きちゃいました。

銀髪お嬢様（前書き）

感想待ってます。

銀髪お嬢様

前回のお話をAパートとするならここからがBパート
戦隊物だったからこそが本番。スタッフさん達が熱を入れるところ。

『解散部』

とても残念な人達が集まり、それを改善（残念な所と解散）していく部活。

しかし、みなが残念なので中々卒業できない。

（公式ホームページ参照）

「どこだよ！！ ホームページって」

「www .」

「いうなああああ」

こんな感じです。 はい 。

『解散部』へ入部してはや3日 どうにも慣れません。慣れたら終わりだと思ってます。

3日前、突然金髪少年に勧誘され 黒髪少女に入部しろと言われ
『考えますー』と言って逃げて 翌日、金髪少年にずっと背後に憑かれ

結局入部をした。 ……………不幸だ。

では、改めて部員（残念な人達）を紹介しよう。

「この人が『解散部』部長の日笠 夜」

眉目秀丽 才色兼備 e t c . . . と多彩だが性格が捻くれていて、それが原因で友達がいらない。

身長は164cm 体重不明 黒髪のスラーっとした感じ。
ただし胸がない。 A A Aカップらしい(炬調べ)

「今、言っではいけないことを言っただろう」

「……いや、な、なにもいってないですけど」

恐ろしく怖い。目力で人を殺せるような……そんな感じ。

「ちゃーっす。あら、夜と颯 速くね なんちって」

「いや、面白くないし」

「殺すぞ 不良風情が」

こいつが練馬 炬

カッコいい 人当たりもいい 運動神経もいいと3拍子そろっているが……

バカである。身長は172cm 体重不明 金髪でツンツンヘアー情報網がすごく、あらゆることを知っている。

「別に僕は不良じゃないってば。それに怒るとむ(殴) 」

「本当に死にたいようだな」

日笠さんの後ろからゴゴゴゴゴと、出てきそうなくらい怖い。

「それと、あらぎ」

「いや、らが一個少ないです」

「私の事は今後 夜と言うがいい後、敬語は止める。気持ち悪い」
うわ、気持ち悪いって言われた(泣

「よかったな、颯 これでいっp(殴)」

なた殴られてるし、今度は本格的に死にそうだな。

「よろしく、夜」

「ん………… ああ、よろしくな颯」

こうして、少し打ち解けたそんな気がする。

翌日。 毎度の如く（略）

教室へ向かうと…………

「おつす 颯」

「ああ 炬か…………」

「なんだよ、テンション低いな。おい」

「毎日のことでもう慣れたよ」

毎日、瑞希にあんな起こし方されると、そのうち死ぬ。絶対に…………

「まあ、今日も元気にいつてみよー」

「おー」

バ力は元氣 その言葉の意味を知った。

放課後 寄る所もないので『解散部』へ

「そついえば、部員つて3人だけ？」

俺が疑問を言う。

「いや 部員は全員で8人いる」

俺 夜 炬 3人

残念な人が後5人もいるのかよ。

「それって先輩？後輩？」

「先輩に1人 後輩に2人 同学年に2人だ」

そりゃすごい。まだ学校始まって1ヶ月も経ってないのにもう後輩に2人も……。

「残念な人はポスターに惹かれてくるんだ」

「えっ！！ マジで！」

「ああ、お前も惹かれただろ」

「ん……ああ」

凄いな、あのポスター。

すると、ドアが開いた。

「あれ、炬は先生に呼び」

ドアの先には、銀髪の見た目がお嬢様 胸も大きい
何故、こんな所に来たのかわからないくらい御しとやかな人がいた。

「あの人も、ここの部員？」

すると、夜は本を読みながら舌打ちした。

「ああ あの乳デカもこの『解散部』の部員だ」

乳デカとか女の子が言うんじゃないやありませんっ！！ って言いたくな
った。

「あ……あの」

オドオドとしている。 夜が怖いから？

「ああ、俺は新入部員の2 A 蘭 颯だ。よろしくな 颯でいい
から」

「よろしくなのです」

そうだった銀髪巨乳さんは俺の隣に座った。

「……………！？」

「どうしたのですか」

「いや……はっは」

こんな所、瑞希に見られたら殺される。

まあ、現に夜にガン見されているけどな……

「あんた 名前は？」

「私は右坂 みきさか 芹菜 せりな と申します 芹菜とお呼びください」

右坂……どこかで聞いたことあるような……。

「颯さんのことは、いつも瑞希さんから聞いています」

あ、思い出した。前に瑞希がいつてた、銀髪巨乳の友達が出来たって、この人だったんだ。

「いつも、瑞希がお世話になっております」

「いえいえ こちらこそお世話になっています」

両者でお辞儀をした。なんだこれ？

夜は頑なにこっちを見ている。俺が向くと慌てて本を読む、いやばれてるよ。

「まあ、なんだ。よかったじゃないか 右坂」

「そうですね、日笠さんもよかったですね」

「な、何を言っているんだ」

急にあたふたし始めたぞ。なんで？

「まあ、今日はこの辺で」

そついつて、芹菜さんは立ち上がった。

「きゅっ」

「あぶなっ」

倒れかかった芹菜さんを助ける。

その時、どうやったか知らないけど俺は仰向けにその上に芹菜が乗

っているという形になってしまった。

「あ……芹………菜さん？」

「なんでしょうか？」

「ど、退いていただけると………」

「そうですね」

いやあ、なんか恥ずかしい／／／／／／／

こんな人気のない部屋………あ、夜がいたわ。

そんなことになっていると………

「ふああああ」

芹菜さんが大きな欠伸をして僕の上で寝てしまった。

「えええ　なんで!？」

「こいつはあらゆる所で寝るぞ。しかも一度寝たら当分、起きない」

「はああああああああ」

夜が補足を入れるがそんな補足いらねえ………助けてくれー

俺の腹の上つてか、顔がもう隣にある状態で約2時間　過ごすのであった。

芹菜の髪の毛の匂い　いい匂いだった………

べ、別に匂いフェチじゃないんだからねっ

いや　ホントに不幸って嫌ですね。

先輩（前書き）

学校が始まって幾数日。

疲れる。

疲労感バリバリです。

誰かー俺にもう一度夏休みをおお
・
・
・

先輩

流石にそろそろ解散部にも慣れてきたこの頃。
残りの部員も気になるこの頃。

瑞希の起こし方がグレードアップしたこの頃。

「あれだな この部活って基本的にヒマだな」

「まあ、何もしない部活だからねえ」

俺と炬はだら〜んとしている。

夜は本を読んでいるし 芹菜にいたっては紅茶を飲んでる。お嬢様
かつ！！

「なあ なあ夜。しりとりしようぜ」

「嫌だ」

速攻で断られた。 高校生にもなってしりとりかよ…………。

「他の部員って何でこないんだ？」

「ああ お前はまだ会ってなかったんだっけ？」

「ん まあ」

「いやあ 馴染むのに大変だよ。特にみなっち先輩は…………」
みなっち？ 誰デス力。

「こら炬。先輩をその名で呼ぶな」

先輩なんだ

「えー いいじゃん」

そんなこんなで時間は瞬く間に過ぎていく。

こんなんで、いいのか？

ある日の昼下がり。

こんなに暖かい日は屋上で寝るのが一番だと、昼休みを使って寝ようとした。

階段を駆け上がり、屋上へ通じるドアを開ける。

あら？ 先客がいる。

そう思いながらも比較的日の当たる場所で横になる。
誰だろう？ 1人で空なんて見て…………。

茶色に染まった髪が綺麗に光に反射し、風が靡いて一段と輝かせる。
綺麗な人だな。

そう思いながら、俺は目を閉じた。

「やばっ もう時間がない！」

次に起きたのが授業開始5分前

ちなみに、この距離からだとかどんなに急いでも7分はかかる。

不幸だ。 確実に笑いオチになってしまう。

頭を抱えこみ絶望する俺はふと寝る前に見た茶髪の子を思い出す。

まだいるのかな…………。

覗いてみると

今にも飛び降りようとしている茶髪の子が…………。

これは、危ない。

と、思う前に俺は走り出していた。
ガツと少女を掴み 引っ張る………が

そのまま上手く入れ違い 俺は屋上の空へと飛ばされた。
あ わかったぞこれ

死亡フラグってやつだ。

「あああああああああああああああ………」
落ちてる途中 約1分秒思った。

これは流石に死ぬ コンクリートにぶち当たり綺麗に死ぬ。
あー こんなことならもう少しアニメ見ときゃよかった。

次回超楽しみだったのに…… まあ いいや。有難う俺の16年
不幸だ。

俺はそのまま地面に急降下。
目を瞑り死を受け入れた。

気が付くと 保健室のベッドで寝ていた。
頭は少し痛い但他は何も支障がない。
あれ………記憶を失った展開とか そういうんじゃないんだ。よかった。

でも、誰が助けてくれたんだろ??

「あ、目を覚ましたようだな」
にゅっと声の方を向くと、保健室の先生 黒羽^{くれば}先生がいた。

見た目が中学1年生と小柄で何故教師が出来ているのか不明なくらい。

白衣も似合っていない。ただのコスプレにしか見えません。ちなみに、俺は1年の頃からよくお世話になっている。

えっ……なんでかって？ それは不幸なことが起きると毎回ここで治療しているカラダヨ。

ちなみに

「あ くろはね 黒羽先生」
ドスッ

「いたいれす……」

「その名で呼ぶな、次は殺すぞ」

くれは を くろはねと呼ぶとガチでキレる。

「それより、今度は屋上から落ちたんだって。良く生きてたな」

「なんで、それを？」

「いや、お前を担いできた子がいてさ。名前はなんだっけ」
頭をトントンと指で叩き思い出そうとしている。

「歳か……」

殴られた……。

「ああ 思い出した。3・D組の菊池 きくち 湊 みなと だったかな」
3年生…… 先輩か。

お礼をいわないとな……。

「その菊池先輩は？」

「ああ あの子ならお前を置いた後帰って行ったぞ」
ん？ そうなのか。お礼は後日でいいか。

「それより、またケガすんなよ治療めんどうだし」

「それ保険の先生が言う言葉じゃねえよ」

俺はそう愚痴りながら保健室をでた。

誰かがこっちを見ている気がした。

後ろを向くが誰もいない。

ふつとふいに向くと 赤い髪をしたツインテールの子が見えた。

「……………誰？」

俺は思い出せようでー 思い出せない。

まあ いいか。その内思い出すでしょ。

そう思い 俺は教室へ帰った。

??? side

「やっとみつけた。運命の人」

「待っててね！！ もう少して会いに行くから」

颯 side

教室へ戻ると、いきなり瑞希が飛び込んできた。

「うええええええええん」

「でゅぶしっ」

そのままコロコロと転がっていき、廊下の壁へと激突。多大なダメージを負う。

そのまま、廊下に出た為いろんな人に凝視され 辱めを受ける。
瑞希のファンに殺されかける。

さんざんな目にあつた……。

放課後 『解散部』 部室

「まったく今日はひどい目にあつたよ」

「どんまいだな 颯」

「ははと笑う炬。 くっそお殴りてえ……。」

「それにしてもあの人…… たしか菊池 湊って……」
その時、部室の空気つてか静かになった。

「お前なんて言つた？」

「え…… 菊池 湊つて」

すると、炬と夜はふううとため息をはいた。

「その人 菊池 湊先輩は『解散部』の部員だ」
「そして」

夜が指を差した所にいたのが

「チラッ 部室のドア前からこっそりと覗いている」
じゅっと俺の所を見ている先輩がいた。

「ちなみにみなっち先輩 男性恐怖症だから」

はい？

「男性恐怖症とはなんぞえ？」

ん なんだかよくわからないけど……………不幸だ

テスト！！！（前書き）

颯 「実際、俺って不幸？」

炬 「不幸っ！！」

颯 「マジで！！！！」

炬 「マジで！！！！」

颯 「そしてお前は」

颯 & a m p ; 炬 「バカ ！！！！！！！！」

テスト!!!

『男性恐怖症』

男性恐怖症とは、恐怖症のひとつ。個人差はあるが、男性に触れられると強い不安感に駆られたり、男性と話すとひどく赤面したり、男性と一緒にいることに耐えられないと

いった病的な心理。中には男性が近づいてきただけで不安を感じる人もいる。

通常は女性に見られる現象で、「18禁な被害に遭った」

「父親（兄弟）から虐待を受けた経験があった」

「子供時代に男の子からいじめを受けた」といった経験を持つ人が、男性に対するトラウマとして表れる心理であることが多い。

ただ、恋愛（異性愛）にあまり興味がなかったり、

男性との付き合いに価値をおかない女性が、

男性恐怖症と決めつけられてしまうこともある。

（wiki調べ）

結論から言って男子が苦手だが嫌いではないと言う事。

「はあ、でその菊池先輩は男が苦手と？」

「.....」

「何か言ってくれないと、話せないんですが？」

「.....」

ああ 空気が重い。 押しつぶされそうだ。

「言っておくけど湊さんは男子とろくに話せないわよ」

「それを先に行ってくれ、思いつきり話そうとしちまったじゃねえか」

「別に颯のことなんて知ったこっちゃない」

うわぁ 黒い 腹が黒い まさしく腹黒。

「湊先輩 大丈夫です。一見男っぽく見えますがこの子は男の娘ですから」

「……………そうなの？」

いや、俺に聞かれても……………。しかもなんだよ。男の娘ってそんなに女っぽいかな？

「ちなみに、みなつちと話したことある男子は誰もいないぜっ！！」
「わかつとるわ 感的に」

炬はやっぱりアホだ。そして、バカだ。

「湊先輩」

「……………」

一向に部室に入ってこない先輩は超隠れている。

「昼間は助けていただいてどうも」

！？ のような顔をした湊先輩は何故かゆっくりと部室に入ってきた。

「おお 珍しい。みなつちが男の人に反応するなんて」

「えっ 今ので反応したの？」

炬のいう事がいまいち理解できなかった。

「やっぱり無理です」

そういつて湊先輩はぴゅっつと逃げて行った。

「あー 逃げちゃった」

「やつちまったな。颯」

「え 俺？」

何故、逃げ出したのかよー意味が分からん。

まあ、でもお礼が言えたからいいとするか。
今日は珍しくふ……………落ちたの、忘れてた。

「不幸だあ」

次の日 さらに一週間が経ち、そろそろテストも近くなってきたこの頃。

「そついえば、テストまで3日だな」

「そうだったな」

「えー!! マジで!？」

俺と夜は当たり前な反応。炬は全く知らなかったらしく驚いていた。
「そうなのですか？」

芹菜も驚いていたが、炬ほどではなかった。

「ちなみに……………炬は置いといて、夜と芹菜って頭いいよな？」

「ああ、私は学年10位には常に入っているぞ」

「私も10位内には入っていますわ」

余裕だね。まあ 俺も大丈夫だけど。

「ちなみに、炬は？」

「下から2番目!!」

キラッとポーズを決めた。ある意味凄いです。逆にお前より下の奴

が見てみたい。

「つまりアホでバカだと……」

「そういう事だ」

呆れて何も言えないわ。

「じゃあ颯は何位なんだよ。まさか俺より w」

「笑いを付けん。俺は……・・・前は17位だった」
炬がドン引きしていた。

「なにそれ……不幸体質なのに勉強はできるの？」

「いや、別に不幸体質で当日事故に会ったとかはあるけど」

「あるんだ!!」

「試験前に急に腹が痛くなって4時間目までトイレを動けなかったとかもあるけど」

「あるんだ!!」

「突然、イスがジェット機の如く飛んで行ったこともあったけど」

「それはA B! やん」

どんな会話だよ。しかも、ボケとツツコミ反転したし……

「まあ どう奇跡が起きても炬はバカだってことだ」

簡単に夜が結論を出した。

「そうだ! みんなで勉強会しようぜ」

炬がそういった。

「でも、今日は金曜日ですけど……」

芹菜がそういう。アホなんですあいつは。

「いや、いや、やっぱり誰かん家泊まり込みでさあ」

「……………」

夜の顔が赤くなっていく。

「じゃあ 場所は颯ん家だな」

「マジかよ!? まあ 別にいいけどさ」

「颯さん家にお泊りですかぁ……」

何故か、少し嬉しそうな芹菜と少し顔の赤い夜。

「で、で、でも その……あれだ。お前らはいちよう男なんだし……その」

モジモジしていて、何を言っているのかよくわからない夜。

「大丈夫。俺が女子になにかしたら俺が瑞希に殺されるから……」
ズドン。みんなドン引き。

こうして、明日と明後日は『解散部』で勉強会をすることになった。

それから2日間に渡って勉強会を行った。

俺がどうなったかは、次回2・5として描く予定です。

そして、炬の勉強の成果は……………。

「やったよ!! 下から15番目だ」
超喜んでいた。

結果的にはそう対して変わっていない。

ちなみに、ここの学校の2学年全校は280名
ほら、たいして変わんないでしょ。

ピリと炬の順位の点数差は2点だそうだ。
どんだけだよ。

ちなみに、俺は12位　瑞希は39位　芹菜は7位　夜は4位と言
う結果だった。

意外と頭いいんだな、このメンツ。

「それにしても、瑞希とやらがあんなに凶悪だったとわ……………」
「意外よねえ」

「いや、あんな態度取るの俺だけだから」

「ええ　マジで！！　なんかすげえ」

何処がすげえんだよ。

そんなほのぼのの会話をしながら部室に行く途中。
途中ですよ、部室ではありません。

「おや　部室の前に誰がいるぞ？」

「本当だ、赤髪のツインテ」

夜と炬がいち早く気づき指を差す。

あら……………　凄い色ですこと。自分の事言えないけど。

「！！！」

こちらに気づいた赤髪の子はこっちに向かって走ってきた。

「何？　まさか僕のファンのな？」

「そうだと面白いんだがな」

「夜に同じく」　「私もですわ」

「ええ！？」

そんな会話をしていると抱きついてきた。
炬ではなく俺に

「ハウ　いい匂いだ」

俺の腹に突撃してきていきなり匂いを嗅いできた。
何！？　この人達って匂いフェチ多いの？

「……あれだな」

「……あれですね」

「……僕のファンではない」

え、なんでみんなこつちをそんな冷たい目で見てるの？
確実に俺が被害者ですよ。

「えっ………と　どちら様で？」

すると、赤髪少女は立ち上がり

「理子　参上！！！！」　と一言。

ああ、今日も不幸だつああああああ。

番外編 テスト勉強

ピンポン。

とある休日に1つのチャイムが鳴った。

それは、夜達であろう。

でも、今は出れない。 出たくても出れない。

何故なら今、俺は

瑞希によつて拘束されているからだ。

「 瑞希さん。 人が来たんですけど……」

「 大丈夫 」

何だ、その星は

「 ちょ
」

言い訳をする俺の横に一本の包丁が付きつけられた。

「 何か言つた? 」

「 すいません。 何も言つてません 」

どうしよう。 このままでは命がいくつあつても足りない。
つてか、誰か助けて

「ってか、場所はここだよ……」

夜は颯の家を見上げ、そう呟いた。

「でっけえ〜な。こりゃ」

炬も釣られて言う。

「そうですか？」

芹菜だけ普通ですわと言っている。

颯の家は普通の一軒家ではなく、広い屋根に大きな庭。なんと、庭の真ん中には池らしきものがある。

「それにしても」

言おうとしたことを止め、ボーッと家全体を眺める夜。

夜からイメージされる『黒』の服ではなく、『白』の服に水色のスカート

後ろ髪をくくってポニーテールにしている。

「早く入ろうZe」

キラッとカッコよく決めた炬。

熱苦しい感じの赤Tシャツ、5月にも関わらず半ズボン。

しかし、どんなに普通な格好でも本人がカッコいいので決まっている。

「そうですわね。もう時間は過ぎていますよ」

お嬢様感がバリバリでている白のワンピース。
麦わら帽子もかぶっている。

「あらあ 出ないですな」

「寝ているのか？」

「電話してみましよう」

「「えっ！！ 電話番号知ってるの！？」」

きよとーんとしている夜と炬。

ブルルとしばらく経ち電話に出た。

「もしもし、芹菜でございますが」

颯 side

にゆ？

電話のコールが……

すると、瑞希は俺の携帯を奪い取るように取り携帯を開いた。
この開いたは、パカッと縦に開いたのではなく
パキッと横に開いたのであるのでご了承ください。

「あゝ 俺の携帯が……」

悲しむ俺。 どうしようもって不利な展開になってきた。

こうなったら

「あ、あの……瑞希」

「ん？ 何かな？」

「すまん……」

そういつて俺はベットの隙間、2?くらいの所に用意しておいた爆竹的な物を

ドン。

「ひいっ!!!」

ビックリして頭を抱える瑞希。

その隙に、拘束された足を抜け出し腕が縛られている中で逃走を図った。

ダッシュ。 これ以上、経っていると殺^やられる。

『解散部』 s i d e

「あら、電話が切れてしまいましたわ」
芹菜はそういつて携帯をしまいこんだ。

「本当か!? いないのか……………」
ちよつと不満な夜。

「いやぁ マジですか! 僕、バカのままなんですけど」
バカ丸出しの炬。 もうこいつはいいや。

すると、家の中からドタドタと駆け下りてくる音が聞こえた。

「お! いるじゃないか」

「遅いねえ」

「ようやくですか」

みんなが期待してる中、出てきたのは

颯 side

「た……た……すけて」

必死で飛び出した先にいたのは『解散部』のメンバーだった。

「お……ま……」

「あはは 颯。お前Mか!!」

「違うわ!!! 殴るぞお前」

ドン引きしている夜。

あははと笑い続けている炬。

ちよっと、引き気味な芹菜。

「殺される、」

そこで後ろからの殺気を感じた。

「は……や……て……くん……」

「ひiiiiiiii」

腰をおろし、夜の後ろに隠れる俺。 ヤバいです、怖いです。

「ちょ……隠れるな」

「あら、瑞希さん。お久しぶりですわ」

すると、真っ黒な目が通常の目に戻った。

「あ! 芹ちゃん。おはよー」

ファンファンと手を振っている瑞希。

よかった……助かったよ。

そこから、瑞希に内容を説明し何とか普通になってくれた。

そして、2日間の勉強会が始まったのであった。
内容は読者のご想像にお任せします。

そして、話は戻って週明け、テスト終わりの水曜日!!!

「理子 参上!!!」

シャキッと決めポーズをし、赤髪をなびかせる。

「……誰？」

「誰だこいつ？」

「私は知りませんわ」

後ろの3人はヒソヒソと話していた。

俺にも話に入れてくれ
。

「で、その理子は何故 俺に？」

すると、理子はピョンピョンと跳ねて言った。

「理子はね、お礼をいいに来たんだよ」

ワーワーと言っている後ろの3人。うるせーよ。

「お礼？ 俺は何もやってないぞ？」

「それはね、去年なんだけど………」

理子は少し考えて

「詳しい話は次回で！！！！！！」
ピシッと敬礼する理子。

「あゝ 不幸だ」

理子 参上!!!(前書き)

ここから3話。

理子 参上!!

一年……半年……いや……どのくらい前だろ。

実際、昨日の晩飯のメニューも定かではないのに急に数か月前のことと思い出せと

言われてそう簡単に思い出せるわけがない。

ましてや、その人物が女の子!!!

しかも、赤髪!!!!

さらにツインテール!!!

きゃわええ!!!!!!

………すいません。調子に乗りました。

俺は口りではありません。

たぶん。

そして、現在。脳から脱出した魂がドッキングした頃。

「で、次回になりましたけど………」

「そうですねー」

「……………」

話が続かねえー

「で、その理子さんは何故 飛び込んできたのですか？」

「んゝ なんとなく!!!」

うわぁ なんとなくって………。

「まだ理子のこと思い出せない？ あんなことまでしたのに……………」

頬を赤らめる理子。赤い髪とうまくマッチングしている。

「あれだな。」

「…そうですね」

「…くそー 僕のファンじゃねえのかよ」

まだ話してるよー 炬に至っては悔しがってるし

「待て、あんなことをした覚えはないし、俺の知り合いに赤髪の奴はいない」

すると、理子は『うんうん』と頷き一言。

「それじゃあ 回想で!!!!!!」

と、いうことで回想タイム start。

これは、約3か月前 今は6月なので3月の終わり。

理子は、この高校 私立 南丘高校に受験をしに来たらしい。

ちなみに、もう何話もやっているが高校名を出したのは今回が初！と、いうことで大体の説明をしよう。

私立 南丘高校

全校生徒約1万人

これは、中 高と一環の学校なのでこの人数である。

ちなみに、県では有数の進学校。

アホの炬がこの学校にいれるのは中学校からいるためである。

ちなみに、俺と瑞希は高校からである。

そんな概要は置いて、受験当日。

その日はいつもより肌寒く 本当に3月か？ とツッコミたくなるほど寒かった。

俺はある仕事の為に学校へ足を運んでいた。
まあ、わかる通り試験の手伝いである。

その道中 いつもなら軽く何かに引かれたり、電柱が倒れてもいい
ような感じだった。

そこで俺は出会ったらしい

真っ赤な髪をした、小柄な女の子を。

「貴方、南丘高校の場所って知ってる？」

それが赤髪少女 理子との出会いだった。

「ああ、知ってるってか、俺はその生徒だ」

「ん！？ 本当！！！ なら、案内してよ」

うお！ いきなり声が変わった。

さっきまではクールな声やったのに、今は甘ったるい声になった。
女ってこわっ！！

「ああ、いいけど。なんで南丘に用があるんだ？」

「……………まよっちったてへっ」

「お前、もしかして受験生か？」

「Yes 理子は中学3年 今日南丘に受験しにやってまいりましたのです」

「そうか、それなら早く行かないと間に合わないな」

「そうですねえ」

なんか、マイペースな子だな…………。

「じゃあ 行こうか」

「はい！！！」

30分……そんなにしなかったくらいで学校には無事着いた。
校門前、道路に差し掛かった時に……

赤髪少女は俺にお礼をいいながら颯爽と走っていった。
赤信号を……

ブーとトラックのクラクション。

お決まりのシーン。

俺は無我夢中で走り出した。

さつき出会った子でも、そこら辺で遊んでいる子どもも、俺は助けに行く。

例えそれで俺の命が尽きても。

「だらつしやあああああ」

ギリギリ2mあるかないか

俺は飛んだ。雪で滑ろうがどうでもよかった。

トラックが止まっても、よかった。

俺は飛んだ。

キイイイイイイ

トラックのブレーキ音が聞こえた頃には俺の腕の中には赤髪の子
理子がいた。

「……………」

しばらくの沈黙。

そして、最初に声を上げたのは以外にもトラックの運転手さんだっ
た。

「おい あんちゃん達、大丈夫か？」

はい、大丈夫です。その言葉が出なかった。

どうやら、雪で滑ったおかげで地面に頭を強打したせいで意識が朦朧としてきた。

トラックの運転手さんと、俺の腕の中にいる赤髪の子は叫んでいる。

……で………も、

俺はそこで目を閉じた。

気が付いた時には、もう受験は終わっていて俺は保健室で寝ていた。

「お前は毎度毎度、不幸の塊かつ!!」
と、言ってきたのは黒羽先生。

「……………あの子は？」

「ああ、赤髪の子なら保健室までお前を運んできて何処かに行っちゃったよ」

俺を……運んできたのか？

あんなに小さい体で

助けられたのは俺の方か。

起き上がる俺。頭には包帯がぐるぐる巻きだった。

「もう、起きて平気か？」

「はい、問題ありません。丈夫だけが取り柄ですから」

そういつて、ベットから足を降ろす。

すると、廊下からドタドタッと走る音がし、保健室のドアが開いた。

「ばだでぐぬ（颯くん）」

そこに立っていたのは、泣きながら立っている瑞希だった。

「大丈夫だから、その涙と鼻水を拭け」
「はは、と笑う。」

受験には間に合ったのだろうか？

そんな思いを胸に俺は瑞希と笑った。

「と、言うわけです」

理子はピシッと敬礼をした。

「あー そういえば そうだったな。赤髪の子はお前だったのか」
「そうです、理子だったのです」

そんなこんなで、話は過ぎ。

「で、理子は何故 ここに？」

「それはもちろん。先輩に会いに来たのです」
「ビビッと言いながら鬼のポーズ。」

「お礼を言っ てなかったの？」

「 いや、お礼を言うのは俺だ。ありがとう」
頬を赤らめる理子。

その背後では3人の部員がヒソヒソと話していた。

「そうだ！！ お前、『解散部』に入らないか？」

「『解散部』 ああ、ここですか？ いいですよ。最初から入る為にここまで来たんですから」

理子の手には、入部届が握り忌められていた。

「だってよ、夜。入部希望者だ」

「ん？ そうか。よろしくな」

曖昧な返事。

「で、お前、苗字は？」

「さっき 言いましたよ」

へ？ 言っ たっ け？

「なあ、なあ早く部屋行ってトランプやろうぜ」

「あら、いいですね」

「どうせ、炬の1人負けだ ほら、颯 三條 理子行くぞ」

そういつて、3人は部屋へ入っていく。

夜、なんつつた？

「お前、もしかして」

「そう、理子の名前は三條 理子。」

グググッと溜め、

「理子 参上！！！！」

なるほど、そういうわけか。

俺は、慕ってくれる後輩が出来た。

きっと、これから先、面白いことになるであろう。

そう思いながら、理子に手を引かれ部室へ入っていく。

霊的な物（前書き）

今回は短いので2話連続投稿。

グブッ！..！

霊的な物

前回のあらすじ。

解散部に新しい部員が入りました。

颯。

と、話はいつも通りだるだるなお話となります。
理子が入部して約1ヶ月、そろそろ7月に入りました感じが出てきたこの頃。

「あー ヒマだ」

炬がソファで横になってそういった。

ちなみに、今は夏服。

冬服とはまた違った、感じだぜ！！ ヒヤッホーイと心の中で思っていたりもする。

まあ、それは置いて、今はダラダラとしているのだが……

「颯先輩！！ 理子と遊びましょう」

「ん！？ いいぞ。何するんだ？」

「主に18禁な事で」

「ぶっ」

お茶を飲んでいた俺は、吹き出してしまった。

「な、な、何言ってたんだ。お前は」

「理子は至って真剣です。真剣と書いてマジと読みます」

「いや、そんなことは聞いてねえよ」

吹きだしたお茶を台付近で吹き終わり、再びソファーに着く。

ちなみに、夜は本を読んでいるし芹菜は何処かいない。

湊さんはあれ以来きていない。

「ねー、ねー颯先輩。やりましょうよ。」

「いや、やんねえよ」

「理子のこと嫌いなんですか？」

隣で腕を組んで上目づかいで聞いてくる理子。

「ああ、えつとな」

そんな事を言っていると、ガタツとドアが開いた。
みんなは振りむいたが、そこには誰もいなかった。

「イタズラか？」

夜は本を閉じ、ドア前まで歩く。

しかし、廊下には誰もいない。

ドアを閉め、元の位置に座るが、またドアが開く。
そんな繰り返しの中、俺は悟った。

これは、霊的な物だと。

「これはあれですね。霊ですね」

俺がそう切り出した。

「ほ、本当か！！ 颯」

「俺ってよく霊に憑かれるんですよ。」

それで知り合いに霊に詳しい人がいるんだけど、それっぽいわ
すると、炬が起きだして、

「マジで！！！！ 霊！！ 会ってみたいっす！！！！！！」
目をキラキラ輝かしていた。

「いやあ、実際霊は大変だぞ。俺、毎日憑かれてるし」
「そうなんですか！！」

理子がビビッと効果音が付きそうなポーズを取りながら言った。

「では、その友達に聞いてみたとうだ」
夜がそうだった。

「そうだな…… 恋のやつ、いるかな？」

俺は携帯を取りだし、連絡を入れる。

だが、連絡は取れない。

あいつ、またどっかで修行してるのかよ。

携帯を閉じ、ポケットにしまおうとすると理子が……

「そつえば、理子、颯先輩のアドレス知りません。交換しましよ
う」

「ん？ そうだったっけか、まあいいぞ」

「僕も交換するぜえ！！」

「……しょうがないな。わたしもしてやろう」

ということで、解散部のメンバーのアドレスをGETしたのであつた。

自宅。

風呂に上がった後、恋に再び電話を入れる。

すると、1コールで出てくれた。

『もしもし』

「颯だ。ちよつと頼みごとがあるんだけど」

そこから、数分 俺は恋に今日会ったことを説明した。

『うん分かったよ。明日、行ってみる』

「頼んだ」

そして、俺はベッドに携帯を置き、眠りについた。

翌日、朝起きると動けない。

また瑞希の仕業かと思っただが、縄もないし腕も動かせる。

と、いうことは……

まさか、霊的な物？

そんな訳ないよな。はははは、でも動けないな。腕だけは動かせるし……。

つてか、さつきから声でてなくね？ うおおおお

いやあ、ヤバいね、これは初めてだよ。何度か、金縛りに合ったけどここまで凄いのは

初めてだ。誰かー助けてくれー。

そんなことを思っていると、俺の体の中から、黒い塊が浮かんできた。

うおおお！！ なんだこれは、悪？ 俺の中の悪ですか？

すると、黒い塊は浮かんでいき止まったと思ったら

パリーン

窓が突然割れて、聞きなじみの声が

「悪霊退散。」

黒い塊に札を貼り、消滅させていく。

「大丈夫かい、颯くん。」

「……おお、声が出た。ありがとうな恋」

「いや、君が昨日、電話してくれたおかげさ」

？ 俺は疑問を感じた。

「いや、昨日の電話の後、学校に行ったんだ。でも霊はいなかったよ。」

だから、考えたんだ。君が、憑かれたと」

「いやあ すいませんなあ」

頭を掻いて謝る俺。

「じゃあ 僕はもう帰るからね」

そういつて窓から飛び降りた。

「ありが って、窓ガラスは？」

俺は、その後窓ガラスを購入しにいったのであった。

次回のあらすじ。

炬「今回は、解散部初の休日での遊び！」

夜「氣にくわんが、まあいいだろう」

芹菜「それにしても、他の部員さん方はあまり来ないんですね」

理子「理子 参上!!!!」

颯「では、次回 解散部の休日をお楽しみに」

湊「わ……私も……」

解散部の残念な休日（前書き）

理子「颯先輩、理子と遊びましょう。主に18禁なことを全面的に」

颯「しないわー!」

理子「えー、じゃあ、いちや、いちやだけでいいです」

颯「だけってなんだ。まるでいつもやってるみてえじゃねえかよ」

理子「やってますよ」

颯「やってねえよ」

理子「理子の妄想の中で／＼／」

颯「・・・・・・・・・・・・・・・・」

解散部の残念な休日

「なんで、こんな事になったんだ？」

俺は今、待ち合わせの時計台にいた。

白色の服に散りばめられたドクロとハートの服に下はジーパンのよ
うなもの。

「今更、そんなこと言っても何も変わんないですよ。颯先輩」

「ああ、理子か」

「はい 理子 参上！！！」

お決まりのポーズで現れた理子。
ピンクの服に色々のスカート。

「まだ、お前だけか？」

「はい！ 今の所 理子と先輩だけです」

すると、理子はグフと笑って、腕に抱きついてきた。

「な……」

「こうしてみると、理子達 恋人みたいですネ」

周りを見ると、恋人達がきゃっはうふふと歩いている。

あー 恥ずかしくなってきた。

何故、こんな事になったのかと言うと 今を遡ること1日前。

金曜日 放課後 解散部。

「ねえ 颯。明日あそばねえか？」

この言動から最悪の結末にたどり着く。

「ああ、いいけど。何処行くんだ？」

「いや、特にないけど遊園地辺り行きたいんだ」

「お前、男2人で遊園地行くとかマジ残念だろ」

「はい、先輩が行くなら理子も行きます」

率先と手を挙げた理子。

「理子も行くか？」

「はい、ヒマなので」

「それじゃあ、解散部で行こうぜ」

「ん？ 別にいいぞ」

「私もいいですよ」

「……私も」

「「いたんだ！……！」」

かぶった。あまりに唐突過ぎて、炬とハモツた。

「いたんですか、湊先輩」

夜が本を置いて、言った。

「う、うん。私……この恐怖症を少しでも直したいの。だから」

最後の辺は良く聞こえなかったが、まあいんじゃないですか。

この部活は『解散部』

残念な所を解散していくと言う内容なので真ん中である。

と、いうわけで全員が集合した。

「お前ら、速いな」

「やつほー」

「お待たせしました」

「……こんにちは」

メンバーの服は略するとして、いざ残念なメンバーでの遊園地となった。

入場券を買っていざ入園。

「で、どこに乗るんだ？」

「理子は颯先輩と行くなら何処でもいいです」

「おい、お前 いつまでも颯にくっ付いてるんだ」
時計台から、ずっと腕に抱きついている。

「いいじゃないですか！ 理子は颯先輩が好きなんですから」

……
しばらくの沈黙。

「……おい、ジェットコースター乗ろうぜ」

炬の一言。

やっぱりこいつはバカでアホだ。

「ああ みんな行こうぜ」

ゴマゴマした人込みの中ってか休日なのに人が全くいない。

「さあ、早く行きましょう。湊先輩」

「…………はい」

俺の言葉に返答してくれた、俺達はジェットコースターに向かった。
いざ乗ったはいいものの、なんか、ヤバいことになりました。

「このジェットコースター、高くね？」

「そうですね。ここの遊園地の名物ですから」

「なんでも、日本で3、4番目に凄いらしいぞ」

夜が補足説明した。

「…………俺、止めたいです」

手を挙げる俺。

そのまま、泣きながら炬と理子に引つ張られながらジェットコースターに乗った。

ガタガタツと音が鳴り空に向かって、動き出した。

颯「ああああああああ、助けてくれ」

理子「あはは、可愛いですね。颯先輩」

炬「僕、動いてる最中、立ってやるぜ」

夜「そのまま、死ね」

芹菜「怖いですね」

湊「……………」

だんだんと頂上に動き出していく。

そして、落ちた。

一気に。

颯「きやああああああああああああ」

理子「あはははははははははは」

炬「ヤバい、これ外れねえ」

夜「わああああああああああ」

芹菜「きやああああああああああああ」

湊「……………」

結果。

俺「夜、芹菜、湊先輩は瀕死状態。」

理子はずっと笑っていたし、炬にいたっては悔しがっている。

颯「もう、いや 帰る」

理子「待ってくださいよ。颯先輩」

炬「ッ…………、外れなかった」

夜「う…………、気持ち悪い」

芹菜「（ぐったり）」

湊「私、死んだおばあちゃんが見えました」

そこから、各自自由時間となったらしい。

俺は気絶して、覚えていない。

理子はずっと付き添いで俺のそばにいた。

炬はずっとジェットコースターにエンドレスで乗っていた。

夜、芹菜、湊先輩はほのぼのと遊んでいた。

そして、昼に集合となった。

「颯先輩、何食べますか」

「あ なんでもいいよ」

「僕は、かつ井で」

「私はパフエだな」

「サラダを」

「サンドウィッチで」

そんなこんなで、時間は瞬く間に過ぎていき閉演時間となった。

「結局、ジェットコースターのせいで疲れたぞ」

「そうですね、理子は楽しかったですよ」

「お化け屋敷 面白かったな」

「炬はバカだからな」

「あれは怖かったです」

「ひゃ……………」

湊先輩の肩と俺の肩がぶつかった。

「ああ、すいま」

「きやああああ」

湊先輩は思いつきり俺を殴った。

「す、すいません」

お辞儀をした。痛い 痛いよ。

「だ、大丈夫です」

「本当に、すいません」

やっぱり、湊先輩は男性恐怖症と言うよりworkingの伊波さんみたいだな

感じた。でも、そんなに痛くなかったけどな。

こうして、解散部の休日は面白おかしくも終わったのであった。

颯「今回は、部室で」

理子「理子と颯先輩がイチャイチャします」

颯「しねえよ」

理子「えー したいです。ってか、今しましょう」

颯「今回は、部室で雑談だよ」

湊「……………私」

雑談と言つ名の日々

ただ、人より少し不幸なだけでこんな人生を送ると思わなかった。
数え切れないくらい不幸があつて数え切れるほどの幸運。

ある日の解散部。

「雑談をしましょう」

「……は?」

夜が急に声を出したのでみな一同驚いていた。

「違うわね……雑談をしてく……雑談をしましょう」

「そんなヶ原さん見たく言わなくても別にヒマだからええよ」

俺は、そんなことを呟いた。

ちなみに、今日ここにいるのは俺、夜、炬、理子、そして湊先輩だ。
珍しく湊先輩がいるから少しでも男子との距離を縮めて欲しいと夜からの要望である。

湊先輩は相変わらずソワソワしている。

「あー」

俺は頭を掻き、考えた。

「湊先輩はそのままでもいいんじゃないですか?」

「……!」

急に自分の名前を呼ばれたせいなのか、自分の名前を男子に呼ばれたからなのかは

定かではないが驚いていた。

「俺はいつでも協力しますから、まずは俺と仲良くなりましょう」
「……………」

すると、肩の重荷が外れたのか急にだら〜んとし始めた湊先輩。
よかった……これで少し近づけたような気がする。

「で、なにを雑談するんだ？」
「……………!？」

「いや、その忘れてましたみたいな顔をするな、夜」

「ああ、すまん。湊さんと仲が良くなつたのはいいことだ」

「理子は少しジェラシーを感じます」
ぷーっと頬を膨らませ怒る理子。

「ZZZZZZZZ」

と、寝ている炬。

「で、颯先輩!?!」

「ん?なんだ」

「Hつちなことをしましょう」

「ぶっ」

前回と同じパターンだ。

「理子は本気です。颯先輩が脱げと言うならここで脱ぎます。」

「いや、脱がんで言いし、エロい事もしない」

「えー してくださいよ」

「しないわ!!」

これじゃあ いつもと同じです。

「それなら理子、とっておきの物を持ってきます。」

それまで颯先輩は理子のあんな所やこんな所を想像していてくださ

いね」

「K O T O W A R U 」

そう言い残して理子は何処かへ去って行った。

夜の方を見ると、顔が少し赤いし湊先輩も……炬は相変わらず爆睡中だ。

そして、しばらくの沈黙。

俺は結構気まずいので、お暇いとまさせてもらう事に
部室のドアを開け、帰る。

玄関の所へ差し掛かったところで、誰かが声を掛けてきた。

「あ……あ……」

「ん？ 湊先輩」

そこにいたのは男性恐怖症の湊先輩であった。

「……………」

あーこれは気まずい。

どうしましょうか。湊先輩はいちよう男子とか無理だし……………。

「湊先輩、よかったら一緒に帰りませんか？」

俺は思い切って、手を差し伸べた。

一方。

「やってきましたああああ」

どおおんとドアを開けたのは理子。

その手には大きなゲーム機があった。

「颯なら帰ったぞ」

「えええ!!! 待っててくださいって言ったのにいい」

肩を落とす理子。

「なら、理子も帰ります。お疲れ様でした」

トボトボしながら、ドアを閉めた理子。

「……………私も帰るか」

夜はそういつて、カバンを取り解散部のドアを開けた。

帰り道。

隣通し。

2人きり。

こんなに、嬉しいことはなかった。

瑞希は一緒に帰ったりもするが、いつもくっ付いている為こんな感じは味わえない。

でも、これはこれで気まずい。

「あ、あの先輩？」

「ひゃっ な なんですよう」

急に言われたのでびっくりした様子の湊先輩。
俺もビツクリだわ。

「なんで先輩は、男性恐怖症に？」

「……………」

「あ、別に言いたくなくても、言わなくても」

「別に理由はないんだ」
そう湊先輩は切り出した。

「ただ子どもの頃から人と接するのが苦手だった。
小学校でも1人影でこそそそとしていた。中学校で初めて話して子がいた。」

でも、男子は話したことはなかった。ただ、それだけ」

……これは、あれだな。

改善の余地はあるぞ！！！！！！！！

「先輩！！俺と話しましょう。」

俺は、男子っぽくないのできつと気軽に話しかけられると思います。

「
あはは 自分で言っただけ泣けてきました。」

「私は、怖い。人と話すのが…… それでも夜ちゃんは受け入れてくれた。」

だから、それに答えたい。でも
いまはムリイイイイイ」
ダアアアアアアアと全力で走っていく湊先輩。

女子高生らしからぬ速さで走っていく。

俺も全力で追いかける。

その時だ。

無残にもトラックが通りかかった。

あの時、理子と同じシーン。

毎度毎度、何故このシーンに差し掛かるのか不明である。

それはきつと、俺が不幸体質であるからだろう。

周りの人も巻き込むのであろう。

否 刹那！！

「負けるかあああああああ
全力で走った。」

もう足は悲鳴を上げ、うまく動かない。
でも、あと10cm
飛ぶんだあああああああああ。

ドン

気づかずに走っていた、湊先輩を押しだす。
そのまま、俺はトラックにひかれる。

「ぴやあああああああああ」

そのまま、俺は意識を失ったのであった。

ここは私の家。
両親はいない。
私1人だ。

今は、さっき助けしてくれた蘭くんを看病している。
しかし、不思議だ。

彼を触っても怖くない。

それどころか、安心する。

助けてくれた時、胸がズキズキした。
痛いとか、そういう事ではない。

きつとこれが。

「によわっ!？」

あら……ここはドデスカ？

部屋を見渡すと、ぬいぐるみが沢山ある。
可愛い部屋だなあ、と思っていたら

「あ……起きた」

湊先輩だった。

「！！ここ湊先輩の部屋だったんですか」

「もう動いて平気なの？」

「ああ！平気です。頑丈なのが取り柄ですから」

あはは と笑う俺。

沈黙。

「呼んで欲しいです」

「はい！？」

「湊って呼んで欲しいです」

「はい？」

「何故、疑問形なんですか？」

「いや、いんですか？男なのに」

「男だからです。それにもごもご」

最後の辺は聞こえなかったけど、どうやら男性恐怖症は少しは改善されたようだ。

「わかりました。でしたら俺の子とは颯くんと呼んでください」

「うん」

「じゃあ よろしく湊さん」

「よろしく颯くん」

結果、少し打ち解けました。

次回予告。

理子「これから、みなさんにはゲームの世
」
颯「断る」

炬「あはは いんじゃないか」

夜「私はやらないぞ」

芹菜「面白そうですね」

湊「は、颯くんがやるなら……」

n e x t t i m e

i n t h e g a m e 前編（前書き）

理子「今日はゲームの世界へ飛びます」

颯「いやです。」

理子「えー、でも遅いですよ」

颯「え？」

理子「もう、ゲームの世界ですよ」

颯「は？」

理子「では、本編へGo」

i n t h e g a m e 前編

「ゲームをしましょう」

「は!？」

いきなりの理子の発言に驚きと疑問を付ける俺。

「また唐突に」

「唐突ではありません」

理子はビシッと親指を立てて、こういった。

「事前にしっかりとっておきました」

「だからってやらねえぞ!!」

「ひゃう……」

諦めたのか、理子は終始残念な表情を浮かべていた。

「なんだ、これは？」

炬がTV前のゲーム機に目を付ける。

すると、理子がばぁと笑顔になり得意口調で話し始める。

「これはですね。R K N o , 4 2 5 3 B T S です」

パパーンと効果音を口で言い自慢げに胸をる理子。

「R K N o , ってのは？」

「それはですね。R (理子) K (開発) ^{ナンバ} N o の略です」

「それって理子が作ったのか？」

みんな不思議そうに見ていた。

「あれ、言ってますでしたっけ。理子は発明家ですよ」
あら

そんなの初耳。

「それじゃあ もっとやる気が失せたわ」

「ええ!! もっとかまってくださいよ。褒め称えてくださいよ。」

「うわーすごいなー」

「心がこもっていないと思うのは理子だけでしょうか」
「そういいながらも炬は夢中で触る。」

「面白そうですわね」

「そう切り出したのは、芹菜だった。」

「右坂先輩も興味あるんですか？」

「はい。家にはこういったものは無い為とても興味があります」
「ワクワクと背景に書かれたような感じで言う芹菜。」

「やゝりゝましようよ、颯先輩」

「ユサユサ ドカドカ ドスドス」

「揺らして 椅子を蹴り 椅子を倒す。」

「あー わかった。やりやーいんだろ、やりやー」

「えー！！ いんですか？」

「ああ、ただし一回だけな」

「はい！！」

「満面の笑みで微笑む理子。」

「私はやらんぞ」

「そういったのは夜。」

「まあ、こういったことは苦手そうだしな、これが本来の答えだ。」

「わ、わたしは、颯くんがやるなら……」

「ゆつくりと手を挙げる湊さん。」

「すると、全員が凍りついた表情をした。」

「ま、まさか、あの湊さんが男子の名前を下の名で……」

「ひゅゝ やっぱすげえな、颯」

「ぶー ずるいです。なら理子も颯くんって呼びます」

「呼ぶな、それと抱きつくな」

スリスリと抱きついてくる理子。

それを力いっぱい使い引っぺがす。

「わかりました、では、行きましょう。全員で」

「は！！？ わた」

理子はBTSの起動スイッチを軽く押した。

その瞬間、俺達は意識を失くした。

「・・・……あぁ」

目を覚ますと、どこぞの草原に横たわっていた。

周りを見ると、同じ用に、夜、炬、芹菜、湊さん、理子が寝ていた。

「やべえ、どこじゃこりゃ」

そんな事を言っていると、理子が起きた。

「・・・…… アア！」

叫んだ。

「おい、理子、なんだよここ」

「……！？ 颯くん。ここはGameの世界です」

「はぁ！？ Gameの世界かよ、後、颯くんって呼ぶな」

その声に、つられて次々と目を覚ます。

「うお！！ なんだここは！！」

「うわ………」

「これはまた面白そうですわね」

「ええ！！！！」

終始絶句していた。

「で、しっかりと説明しろ理子」

「了解であります」

ビビツと敬礼をし、説明に入る理子

この世界は簡単に言うと、バーチャルの世界であり実際に来ているわけではない。

脳に直接映像を送り、Gameの世界へ飛んで行っていると言う事。現実の俺達はたから見れば寝ているらしい。後、

この世界を救わないと、帰れないと言う難点があると言う事。そして、最大の要因は

「うわぁ……………ここ、ラスボスの手前やん」

俺が指を差した先には大魔王的な者のお城があった。

「あっちゃー 練馬先輩が起動をしすぎたせいで壊れちゃいましたね」

「星を付けるな。」

そんなこんなで、今はラスボスの白の手前だ。

ここはやっぱ次回へ続くべきなのであるうか？

まあ いいや。 次回へ続きます。

i n t h e g a m e 中編（前書き）

炬 「今回は僕の見せ場だぜ!!」

颯 「いや、ただ殺られただけじゃ」

理子& amp・夜 「それ以上は……大丈夫だ（です）」

炬（練馬先輩）はバカだから（ですから）」

颯 「!! そうだったな」

炬 「では、僕の勇士をどうぞ!!」

颯 「感想も待ってまーす」

in the game 中編

初めてのシリーズ。

温かい目でご覧あれ。

本来、RPGというものは最初は出身地の村から1人で飛出し仲間と経験を手に入れ

ラスボスというものを倒す、それが王道だ。

しかし、今の現状はどうだろうか。

否 これはあれだ…… バグってやつだ。

「で、どうするんだ？ これから」

「えっ！！ 颯くん それは愚問ですね」

「うつせえ 後、颯くんって呼ぶな」

「それはもち」

炬がピシッと親指を立て、『やっぱ、ラスボス退治っしょ』と大声で叫んだ。

「……」

全員、沈黙。

炬はそのままフリーズ。

「……さあ、まずは近くの街へ行って武器を揃えましょう」

「えっ！！ 僕の言動スルー？ ちょ………待ってよ」

こうして俺達は、近くの街へと赴くことにした。

つてか、『街』って結構でかいよな。『町』の間違いじゃね？

で、とある『町』ならぬ『街』

「こりゃ……………」

俺達は、空見上げ

「でかくねえか、この街」

一斉に叫んだ。

「それはもちですよ。ここは『街』ですから、」

「それでもGameには限度つてもんがあるだろ」

「大丈夫です、ここはラスボス手前なのでこのくらいが丁度いんですよ」

「どのくらいだああ」

そんなこんなで、俺達はまず武器屋に入った。

「つてか、思っただけど俺ら金もってねえぞ」

「グフフ それは安心してください。ここでは武器の試着、試し等がありますので」

「いや、それでは意味が」

珍しく、声を発した夜。 もうどうでもよなったんだな。

「逃げます」

「やっぱりか!!」

「そして捕まると、去勢的に最初の街に戻ります」

「意外な展開!？」

「さらにLvが0になります」

「もはや死んでる」

「お葬式は1人で……………」

「誰もいねえ」

そう、この世界ではなんでもありらしい。

そして、それぞれが好きな武器や防具を選び、いざ闘争の準備を…

……

ダッ

一斉に逃げた。

武器屋のおっちゃんが追いかけてくる。

その手にはカラーボール！？ 意外と現実感ありまくり、
しかも、防具のせいで上手く走れない。

「どうするんだ、このままだと全員死ぬぞ」

「そうだな、なら誰かが囷となってその隙に逃げるといっのはどう
だろうか」

夜の一言でみんなは視線をある人に向ける。

そう、『解散部』のバカの代名詞

練馬 炬を

「え！ なんか言った？」

相変わらずお気楽な様子の炬。

「お前、あのおっちゃんをひきつけてくれ」

「……………ええよ」

うわぁ 今日ほどお前をバカだと思った日はない。

「よし」

炬はそのまま足を止め、おっちゃんと勝負に出る。

あいつがバカで助かった……………。

そうみんなは感じているであろう。

「これから、どうするんですか？」

「そうです、このままだとラスボスは倒せません」

「そうだぞ、三條 理子。」

「なんとかしろ理子」

「ふえ！！ 全責任理子ですか！！ ならいいでしょう。」

この先に超近道的なルートを作った気がします。」
そういつて、俺達は炬を置いて理子の言う超近道的なルートへ向かうのであった。

一方炬は、

「はあ……やっと追いついたぞ」

手からボールを持っている武器屋のおっちゃんであった。

「さあ ここから先はいかせねえぜ」

ババンツと炬は仁王立ち。

「なら私と勝負じゃ」

「！？ 勝負、いいだろう。ジャンルは？」

「もちろん」

バキバキバキツとおっちゃんの服が割れていく

「デスマッチじゃよ」

最強形態じいさんR's

L v ,

H p

以下全て。

「……………これは」

炬は驚いた。

しかし、そこで諦めないのが炬のいいところだ。

「さあ、勝負だ！！」

炬 V s 最強形態じいさんR's。との世紀末勝負が今始まった。

練馬 炬

職業 勇者っぽい近所のガキ

L v , 1 2

H p 4 7

以下は略。

「えー！ これ低くねえか！！」

そんな間もなく、最強形態じいさん R s 。 の攻撃が開始される。

最強形態じいさん R s 。 の攻撃

右手を振り払った。

炬は避けた。

炬の攻撃

勇者の剣を発動、必殺『光斬り（サンシャイン ブレイク）』

最強形態じいさん R s 。 は1のダメージ

最強形態じいさん R s 。 の攻撃

必殺『赤い（カラー）爆^{ボール}発弾』

炬は29億のダメージ

炬は死んだ。

そのまま じいさんに引きずられ最初の街へと戻る。

「これはちよつとまずいですね」

理子がそういったのも不思議ではない。

何故なら、俺達のステータスが以上であるからだ。

蘭 颯

職業 勇者

L v , 9 8

武器 そこら辺で拾った木の棒

夜

職業 魔法使い

Lv 77

武器 堕威魔法杖

芹菜 湊

職業 村人 A B

Lv 93 92

武器 覇剣 雷の剣

理子

職業 ニート

Lv 100 (戦闘時はLv 2)

武器 パソコン

「結果的にお前が一番ザコだよ」

「う………いたいですう」

俺は理子の頭をぐりぐりする。

しかもなんだよ、夜が意外と普通だし、芹菜と湊さんに至っては
神的な武器もってるのに村人って………使いこなせない!!!!!!

「どうするんだよ」

「どうするも何も、やるしかありません、練馬先輩の犠牲を無駄に
しませんよ」

「南無………」

3人は手を合わせ、炬を見送ったとき、

で、結局はこの5人でラスボスを倒しに行きます。
ちなみに、次回が対決編。
こうご期待

i n t h e g a m e 後編（前書き）

最後です。

なんか、グダグダになりましたけど。

その辺はかんべん。

i n t h e g a m e 後編

話は飛んで、ラスボス手前

「えっ!! 話飛び過ぎじゃね!？」

「いや、大胆こんなもんですよ。現実」

「現実!？」

「現実と書いて現実リアルと読みます」

「うわぁ、現実的だぁ」

俺と、理子はそんな雑談をしている、横で3人はボーっと立っていた。

「もう、帰りたい……」

「めんどくさくなってきたぞ」

「同じくですわ」

そろそろ、ボスの前に着いた。

「ワハハハ、よくぞ来たな」

うわぁ、一世代前のRPGのボスだよ。

「ふぉえじ s j z k x c s d v k b」

わー文字バケしてるううう!!!

「さぁ、勝負だ」

速い、展開が速いです。まだ俺達なんもいってねえよ。

テレレ、テレレ、とドラクエ風に音楽が流れる。

「さぁ、さつさとラスボス倒して帰ろうぜ」

「そうですね。終わらせて、理子とウハウハなことをしましょう」

「しないけどな!」

「一気に決めるぞ!!」

「『『おう！！！！』』」

みんなでハイタッチをし、戦闘にかかる。

魔王ドラ下痢オス

「下痢！？」

体力等不明。

「不明かよっ！！」

魔王ドラ下痢オスの攻撃。
遠くからビーム。

「私に任せろ」

夜は前方へでて呪文を唱える。

「Night barrier」

「ネーミングセンス悪っ！！」

ばああんと守り抜く夜。

「後、私達に」

「はいですわ」

芹菜と湊さんが飛び出して、攻撃を仕掛ける。

「覇剣 魔王斬」

「えっ！ 魔王って！ 味方だね！？」

「かみなりのゝいかずち」

「雷の雷って！！ 2回言ってるようなもんじゃん」

「現実からの逃避」

「逃げるなあああ」

結局、理子は隅でパソコンを開いてるし、2人は攻撃はしてるもの

あれから、数日。

なんや、かんやあつて炬は帰ってきた。

「超楽しかったぜ!!」

バカだ。

そして、夏休み目前のとある日。

俺は珍しくグラウンドを眺めていた。

理由は簡単。

炬の思いつきで、外で遊ぼうぜとなった。

そして、外へ出てグラウンドを見た時………体に電撃が走った。
かつこいい不良少年がいたのである。

顔は美少年で髪は金色、髪は長いが後ろで束ねている。

身長は俺より低く、右目には眼帯、左手には竹刀が握られている。

そして、不良共を倒し、俺達を見て一言。

「ああ!？」

怖い、怖すぎです。

i n t h e g a m e 後編（後書き）

次回、謎の不良少年登場

一人狼（前書き）

新キャラ登場ウウウウウ

一人狼

南丘高校には不良が少ない。

理由は簡単、すべて殺られるからこつちへは来ないのだ。

来たとしても、何十人、何百人で来たとしても無理であろう。

そう、南丘高校 2 - A組所属

『ワン・ウルフ 一人狼』の異名を持つ

ろっがみ 狼神 ちじゐ 知弦。

彼の異名はこの学園どころか、近くの学校まで恐れを成している。

この高校に手を出すと、生きては帰ってこれないと言う。

金髪、眼帯、竹刀、という奇妙な姿ではあるが実量は確かだ。

さらに、さらに美少年と言うスキルも持っていて。

現に今俺達の前には…………

約30人を1人で倒した狼神がいる。

しかも、片手だけで

「あ、ア!？」

ヤバイよ。超睨んでるよ、下で踏み潰されてる人かわいそうだよ。

こんな所、さっさと逃げるのがせん　ダメだ。ここにいたよ、

バカが。

「おー、すげなお前!！」

当然の如く、炬が至近距離まで接近し長々と見ている。

あつちゃー これはダメだな。

「なにこれ、全部お前がや」

「……………ッ」

今の一瞬で何が起った？

炬が急に飛んだと思ったら近くの木が倒れたぞ！！

「おい、いきなり竹刀で攻撃はあかんやろ」

かかか、と炬らしからぬ喋り方で答えた。

え！！ 見えてたの！？ いやぁ、炬は相変わらず運動神経がええなあ

「おめえ、良く避けたな」

「いやぁ、あはは」

頭を掻きながら照れる炬。

「おい、炬そろそろ帰るぞ」

「おー！！ あそばねえのか？」

「ああ、思ったら俺足痛めてたわ」

まあ、嘘ですけど

「そうなのか！！ なら帰るか」

バカなので簡単に人の事を信じます。

そう思いながら、炬は俺の元を過ぎ玄関へ向かっていく。

「おい、待てよ」

止めにかかるが炬は聞いていない。

「ゴメンな、こいつバカだから」

そういつて、俺はお辞儀をして退散した。

後ろを向いた時、何か言っていたけどその辺はスルーしておこう。

次の日、校門前。

瑞希と相変わらず登校し、いろんな奴から『殺すぞ』と殺気を掛けられながら歩く。

すると、門の前に…………

ろっがみ
狼神 ちづる
知弦が

ワン・ウルフ
一人狼が

通りかかる生徒はビクビクしながら隣を過ぎていく、いやあ、ヤバい展開ですねえ。

「オオ!!」

あ、気づかれたっぽい。

どんどんと近づいてくる。

ヤバい ヤバい ヤバい 怖し 怖し 怖し

「おい、お前」

「ついはい!!」

「ねえ、颯くんこの子誰？」

「ちょっと来いヨ」

あら？ 外国人っぽい喋り方になりやした。

「ああ、いいけど」

そのまま手を掴まれ何処かへ進む。

瑞希は泣きながら崩れた。

すいません…… なんか。

そして、そのまま俺は全力少年。

ダッ

「すみません　今日は日直なのでえええええ」
「オ、待てよオオオオ」
走ったよ　全力で。
殺されたくないもん。

で、時間は飛んで放課後。

解散部へ赴くと、誰もいない。
あら、珍しい。
では、帰りますか。
ドアを閉め、ふうと一息。
そして玄関へと向かう。
校門の前に立ち、ああああと背伸びをする。
こしいてえええ　かたいてえええ
今回は、ツツコミがねええええ

ああ…帰ろう。

帰り道、コンビニでガリガリ君を買いもっしや、もしやと食べていると

ふと、視界に入った。
金髪、束ねて、眼帯で、竹刀を
ヒマなので後を付けてみることにした。
別に、興味はないけど好奇心です……あつ　興味ありまくりですね。

どんどんと先へ進んで行く内に、廃工場などが多くなってきた。
これは……ケンカ？

すると、立ち止まりどこかの倉庫へ入っていく。

あー 100%そうじゃん。

こそーっと、顔を出すと、モチの論でケンカだった。

他校との決闘。

1対30近く。

これは………負けるフラグが立ちまくっとなるな。

しばらく見ていたけど、これは一方的だった。

ワシ・ウルフ
一人狼。 圧勝だな。

どんどん敵を蹴散らしていく。

蹴り 蹴り 殴り めえええん！！！！ どおおおお！！！！

か……… かつちよええ！！！！！！！！

惚れた、男子だけど惚れた あ、ホモではありませんぜよ。

バツバツタとなぎ倒していく。

まさに、薙ぎ。

乱舞無双。

最後の1人に掛かった時

後ろにいたやられた男が最後の力を振り絞ってパイプで殴ってきた。

ガゴツ

見事に当たり1人狼が崩れ落ちる。

そこで、俺は動き出した。
我慢ならない。

怖いものは怖いが、人は人だ。
生徒である。仲間である。

「やめろっ！！」

2人前に立つ。

「……おま……」

「大丈夫、俺は」

「なんだてめえ」

「やんのかっ！」

パイプ男が振り下ろしてくる

が

サッ と避け左ストレートを顎にいれる。

崩れ落ちた、パイプ男の後ろにいたのはボスの奴。
モヒカン……… プツ笑っちゃいけない。

プププププ

やべえ 無理です。

「あははははは」

「なんだてめえええ」

いきなりモヒカン男が攻撃を仕掛けてくる。

ダアアンと腹にパンチが入る。

「かはっ！」

腹を押さえ、倒れる

が。

「なめえんなよ」

その時、ふつと僕の髪が風でなびいた。
その瞬間、モヒカン男が後ろにさがる。

「お……おまえは……」

ひいひいと悲鳴を上げ、腰を落とした。

「お前、この傷、知ってるのか」

俺はゆっくりと立ち、一言。

「『この場から消えろ』」

「はいはいはいはい」

モヒカン男はダッシュで逃げて行った。

俺は頭を掻き、一言。

「これを知ってる奴がまだこの街にいたんだな」
これから、どうしましょう。

この子を置いては帰れないのでおぶって帰りますか。
よいしょっ……。

ん？ この子意外と軽いな。

そんな、こんなで俺は過去と少年を思い出した。

朝、結局この子は起きなかった。なので俺のベッドで寝かせておいた。

えっ？ 俺は何処で寝たって？

そりゃ、この子のとな（ry

冗談です。寝てません。男とはいえ初対面の子とは寝れません。

まあ、こんなことを思っていると、当たり前前の如く瑞希がやってきた。

「颯くん」

ルンルンとスキップしながらやってきた。

「やばっ！！ 理由はわからないけどヤバい気がする。」

ダツと部屋から出て、瑞希を説得。

今日の所は帰って貰った。

ふゝ なんか知らんけど助かった 気がする。

ドアを開けると……起きていた。

「……ここは」

ぽあぽあとしている様子。

か、かわええ！！！！

いつも眼帯しているけど、まあ今もしてるけど可愛いな。おい！！

「君は」

「ここは俺の家だ、俺は君を助けただけだ」

「そうなのか……」

少し、考えたようで俺に決心した様子で話しかけてきた。

「もう、やめたよ」

「はい！？」

唐突に！？

「僕は弱い。普通の平凡な君に助けて貰うとは……」

まあ、普通じゃなくて不幸体質なんですけどね。

それから、数十分話した。

結局、意味は分からなかったが、自分は強さを求めて誰もいなくなつたと言う。

「俺はお前の味方だよ」

「えっ!？」

「まあ、良く知らんけど、いんじゃないか。俺はお前の友達でどうせ俺も友達は少ないから1人、2人増えても大体変わねえよ」すると、頬を赤らめて布団の中に隠れた。

えっ!! ナニコレ。 やばい ツンデレだ!! 初めて見たぞ。

「じゃあ俺学校行くから、来るなら早めに来とけよ」
そういつて、俺は部屋を開けた。

一週間後 放課後。

解散部。

人数は、いっぱい。

俺、夜、炬、芹菜、湊さん、理子。

そして、いきよいよドアが開いた。

みんなは注目。

その先にいたのは

「解散部に入部します」

そこにいたのは、黒髪で可愛い女の子だった。

一人狼（後書き）

最後の子はいつたい？

just (前書き)

感想待ってるよー。

お願い！！

なんと、気づいたらお気に入り2件になってました。！！

やったー、これからもぜひ

世界が平和でありますように……あ、本心ですをよろしく！

ってか、このタイトル長いなw

と言う事で、世界が平和でありますように……あ、本心ですの略？ を考えてもらいたいです！！

ぜひ、その辺も感想もください。
宜しく願います(＜|＞)

just

「解散部に入部します」

「どうぞ」

夜は簡単に返事をし、黒髪の女の子を招き入れる。

ここの入部基準低いな、おい！

俺達はそんな思いをはせながら、少女を見ていると……

あれ、どこかで見た事ある顔だな。

ふと一瞬思ってしまった。

「あれ、黒に染めたんだ」

「はい！ おかげさまで」

炬が少女に声を掛け、少女も返答をする。

何？ 知り合いなの？

「え、炬こいつ知ってるのか？」

「何言ってるんだ、颯」

ははは、と笑う炬。ついに頭が逝ったか……。

「ワン・ウルフ 一人狼の狼神 知弦じゃないか！」

「……………」

は？ あの？

チラッと見る。

あははと微笑み返してくれた。

あれ？

「狼神 知弦って女子だったの？」

「「「「「.....」」」」」

お！？ 何故か、しばらくの沈黙が起こってしまった。

「え、気づかなかったのか？ 颯……」

「そんな……」

うるうると涙目をした狼神は

「うわあああああん」

部室から飛び出して行った。

「え？ 何で？」

「バカ者、早く行くんだ」

夜が何故か、熱くなっている。

「行きなさい、颯くん」

冷静に言い放つ芹菜。

「飛んで行って抱きしめてやりな」

「いや、俺、バンダナつけてねえし」

あれ？ これわかる人いるのかな？

そんなこんなで飛び出して行った狼神を探しに行くのであった。

場所は簡単だった。

屋上。

茜色の空がキレイに見える場所。

俺はドアを開け、狼神に近寄る。

「本当に、もしわけございませんでしたああああ」

「！！ えっ！？」

突然の事で混乱している狼神。

またもや、ＡＢ！ネタ

俺は構わず、土下座を続ける。

「いや、あんなにカッコいいからてつきり男の子かと……………」

「……………そうだね」

「僕は、よく言われたよ。だから女を捨てた。けど」

狼神は、俺の頭に手を置き

「貴方に助けて貰って、思ったんだ。やっぱり弱いって、女は男に勝てないって……………」

「……………」

「だから、もう止めた。これからは自分に正直に生きることにするよ」

そういつて、茜色の空を見る。

俺は土下座のポーズから立ち上がり、狼神の隣へ座る。

「なあ、狼神」

「ああ、僕のことは知弦と呼んでくれ。元々はこの名前は嫌だったけど」

今は苗字の方が嫌だ」

「わかった。知弦、お前自分に嘘をつくなよ」

「！？」

「弱いんじゃない、けして弱くないよお前は。今まで一人で戦って来て

周りを護ってたんだろ」

「う……………」

「大丈夫だ、今度は俺が守るさ、何のとりえもない普通の人間だけだな」

俺は笑って、誤魔化そうとする。

「貴方は弱くありません。」

その言葉には、少し驚いた。

「かつて最強と言われ、」

「それ以上先は禁句だ。」

俺は知弦の口を塞いで会話を止める。

「この街に来たのも、それが原因だ。だから、この街では普通に過
ごすさ」

「そうなんですか、では、私もお供します」
そういつて、気前よく立ち上がる。

「そうか、これからもよろしくな知弦」

「はい、よろしく願います」

こうして、俺はまた人を知った。
人と人の関わり合いを

翌日。

「はーやーてーくーん」

毎度の如く、駆け寄ってくる瑞希。

そろそろ、クラスの奴らは

『はあ、またやってるのか……』

と、いう目でしか見たくなつた！！
もう、ぶっちゃんけ悲しいです。

「なんだよ、」

「一緒に帰ろ、」

部室に行きたいんだけどな……たまにはいいか。

そして、瑞希と2人で帰ろうとした時、声を掛けられた。

「颯さん。」

「おお！ 知弦。お前が学年棟に来るなんて珍しいな」

「はい、今度から僕も授業を受けようと思って」

「へえ、で、お前クラスは？」

「2 Aです」

「……………」

あら？ 不思議。

同じだ。でも、開いてる机なんて見たことないけどな……

「じゃあ、一緒だな。よろしく」

「はい、よろしくお願いします」

そういつて、僕らの前を通り過ぎ

いきなり、瑞希が知弦に殴りかかった。

それを瞬間で避け、攻撃態勢に入った。

「なんだ、貴様は」

おお！ 雰囲気に戻ったぞ。

「颯さんの彼女です」

「違うだろ」

「そうなんですか！ 颯さん」

「いや、さつき違うって訂正入れたよな。俺、訂正入れたよな」

「颯さんに近づく女は全員、『殺す』」

きゃー 怖いよ。久しぶりの本気Mode（発音よく）

こうなったら止められない

「ふん、よくも騙してくれたな、颯さんと結ばれるのは僕だ……！」

「あはは、そんな冗談を。私達は結婚の約束までしてるんだから」

「いや、してないよ!? 知弦も張り合わんでいい!」

知弦はこぶしを構え、瑞希は何処からともなく文房具を取り出した。これじゃ、ヶ原さんじゃないかーとツッコむ間もなく、バトルは開始された。

カーン

えっ!? このゴング何?

「さーて、始めりました。颯大好き少女・成澤 瑞希選手 V S 期待の新人、狼神 知弦ううう。」

実況は練馬炬と

「藤原 恋でお送りします」

「お前らまで遊ぶんじゃないよ」

「だって」

「面白そうじゃん」
ハモツた。

この2人案外気が合いそう。
つてか、めっちゃ合ってますがな。

と、いう事でここから実況を炬と恋に任せて、

次回へ続く。

j u s t (後書き)

さあ、気になる続きは？

前書きでも言った通り、感想とこのタイトルの略を募集中です。

ヤンデレ vs 元狼（前書き）

前回でも書いた通り

このタイトルの略を募集しています。

あ、感想も待ってますよー

ヤンテレvs元狼

さあ、前回に引き続き、実況は『バカの代名詞』こと練馬 炬と

」

「『霊のことならなんでもお任せ、電話一本すぐさま解決』 藤原 恋がお送りします」

「2人共、なんだよそのキャッチフリーズ」

「ちなみに、颯のキャッチフリーズは『不幸体質w』だ！」

「キャッチフリーズにwを付けるなっ！！」

「っと、そうこうしている内に動き出しました。」

ダダッと瑞希が走り出した。

「しねええええええ」

「キタ（。。。）！ 瑞希選手のお得意技『しねええ』です」

「いや、普通に叫んでいるだけじゃん」

「この技を使われると、相手の精神が著しく低下すると言う、なんとも残虐な技だああ」

「あれ？ お前らそんなキャラだっけ？」

「あまいな……」

コンパス、ハサミ、シャーペン、etc……

を持っている。瑞希の攻撃を絶妙の所で避け、瑞希のバランスを崩させる。

「終わりだああああ」

そのままの体制で知弦はチョップを決めた。

しかし。

「おつつつとおおお！！　これは凄い！

なんと知弦選手のチョップを真剣白刃どりだああ」
にやっとする瑞希に対して、いつになく冷静な知弦。
そのまま、知弦の手を引き後ろへと流す。

「くられ必殺『バリアブル・スカイ』」

「でした。必殺技王道の超長い技名。しかも、ネーミングセンスが皆無です」

「おっと、ここで知弦選手の構えが変わったぞおおおお」

テンションたけえなお前ら……………。

「『キャノン・フラッシュ』」

いや、ただの突進やん。キャノンってないよおおおお！！！！

「どうやら僕は、貴様を侮っていたようだ。」

そついいながら目を瞑る、知弦。

「今度こそ、しねえええええ」

もう原形のキャラ崩壊してます。　はい……………

襲いくる瑞希の攻撃を見ずに、気配だけで感じるあの技。

そう、昔から伝わる

「『第6感』シックスセンス」

「いや、普通に目を開けて戦えばいんじゃないやね？」

俺の言葉も虚しく、瑞希と知弦の最後の勝負。

互いが交差しあう。

動きが止まった。

「おっと、両者共動きません」

「これはどういう結果になるのでしょうか」

「そこだけ、何故小声？」

「はたして結果は?????」

「もうどうでもいいです……………」

「わ、私の負けよ（ガクッ）」

「ふん、当たり前だ。元一人狼を舐めるなよ」
ワン・ウルフ

「勝者」

恋が知弦の元へ駆け寄り手を上に掲げ

「狼神 知弦だあああああ！」

カン カン カン！

その後、俺達は余りにうるさいと近くのクラスの生徒から文句を言われ

先生に『お前ら、ちょっと職員室に來い』と呼ばれるのは言うまで

もない。

その放課後。

「ああ、あの白熱した試合を誰も理解してくれないんだよ」

「そうだね、あの試合は後の南丘高校の歴史に刻まれるであろう」

「いや、それは100歩譲ってもない」

テクテクと5人で帰っていく。

ちなみに、瑞希と知弦は静かだ。

「まあ、2人共ケガが無くてよかったじゃないか」

そういつて2人を和ませようとしたが。

「私、こいつ嫌い」

「奇遇だな、僕も貴様が大っ嫌いだ」

お互いに指を差し合い、俺にアピールしてくる。

「わかった、お前らは仲良くするな。色々と面倒だから」

後ろでは

「貴様、やるのか!!」

「いいよ、今度は負けないから」

と、言っている。

そろそろ警察沙汰になりそうな今日この頃の出来事であった。

次の日。

「あ！　そういえば」

炬がそう大声で言った。

「なんだよ」

「なんだ　炬　消えるか、帰るかどっちかにしろ」

「明日から、夏休みじゃね？」

「「「「あ！」「」」」」

全員の声がハモる。

誰も気づかなかつたらしい。

まあ、それもそのはずこの学校は前期、後期で別れている為
夏休み前に通知表は貰わないのだ。

「そうだな、海でも行くか」

「はい！　理子、行きたいです」

「颯さんが行くなら僕も」

「行く、うてか解散部で行こうぜ！」

「ん？　ああ、私はいいぞ」

「・・・私も」

「では、私はビーチを用意させていただきますわ」

そんなこんなで夏休み。海に行くことになりました、まる

次回予告

知弦「次回は、僕と颯さんの物語」

瑞希「ああん？　私と颯くんのラブラブな話だわ！」

知弦「なんだと！ もう一回言ってみろ」

瑞希「ラブ、ラブ、ラブ………」

颯「今回は、夏休み初日。」

理子「颯くんと理子がいちゃいちゃします」

颯「しねえよ。ってかまた颯くんって!!」

理& a m p ; 知& a m p ; 瑞「ふいおふおえうい f j w ; d じよい
d w」

颯「もう、勝手にしてろ」

そうだ 海へ行こう（前書き）

今回から、夏休み編。

感想、待ってますよ。

そうだ 海へ行こう

ダラダラとしているその中。
俺らは部活をやっていた。

『解散部』

それは自分の欠点と解散していく部活。
しかし、結局の所ただダラダラと過ごしているだけだ。
どうしよう。

「海に行こうぜ!!」

と、唐突に言ってきたのが『解散部』1のバカ

ってか基本的に解散部のメンバーは頭がいい。

練馬 炬。

「……海か、ここ数年言ってないな。いいぞ
と、賛同する俺。

「颯くんが行くなら理子も行きます」

「って、まだ颯くんネタ引っ張ってんのかよ」

「理子は、頑張ります、颯くんに振りむいてもらえるように」

「それは本人の前で言わない方がいいと思います。」

俺と、絶妙な漫才を繰り広げているのが三條 理子。

なんでも発明家らしく、ちょいちょい何かしら持ってくる。
それで前は酷い目に合った。

「うぬ、海か……夏休みらしい行事だな」

「私も……参加したいです」

黒髪で本を読んでいるのが夜。
茶髪で部室の隅にいるのが湊さん。

「いいですね、家にビーチがあるのでそこを手配しましょう」
The お嬢様なのが芹菜。

「颯さんが行くなら僕は何処へでも行きますよ」
何故か僕を『さん』付けで呼ぶ同級生の知弦。

「それじゃあ、解散部で行くと思いますか」
炬がそういつてまとめようとするが、俺には1つの疑問が。
「思っただけど、他の部員1人も見たことないんだけど、俺」
「……………」

何人かがじーっとしている。
はっ！！ これは禁止^{タブー}なのか！ 言っではダメなのか！

「まあ、そいつらはいわば幽霊部員だ。気にするな」
夜はそうっていたが、気になる。超気になる。
……………でも言いか！！

と、いうことで明日から約4日。
芹菜の用意してくれた、プライベートビーチへ行くことになった解散部達。

……………あ、瑞希と恋にも一樣連絡しておくか。
後で、何言われるかわかんないし。

それで、今日は急きょデパートへ水着を買いに行くことになったメ
ンバー達。

何故、俺と炬まで…………。

「やっぱり、男目線からの意見も欲しいのですよ」
理子がそういつていたがきつと嘘だ。

だって…………俺達

女子の水着コーナーにいるんだもん。

「おい、炬」

「ん。なんだ？」

相変わらずの能天気。

こいつと同じ所にいると俺までバカになってしまふ。

「なんで俺達はここにいるんだ？」

「それは」

言い掛けたが炬はもちろんバカなので

「まあ、いんじゃねえか」

「結局、その結論かよっ！！」

こうなってしまう。

すると、試着室から理子が出てきた。

「どうでしょう、颯くん」

どう表現したらいいかあいまいだが、理子には似合わない大人の女
性が着るような水着。

「インジャナイデスカー」

「ええ！！ 何故、片言なんですカー」

ブンブンと怒りながら再び試着室へ入っていく理子。

はあ、もう疲れたなあ。

後は、省略。

夜は、黒のビキニ 『夜だけに』 と言ったら殴られた。

芹菜は、フリルの水着

湊さんは、タンキニといったよくわからないやつらしい。

知弦は、白のビキニ 夜とは正反対だった。

ちなみに、俺と炬は普通の水着。

男ってそんなものです。 はい。

こうして、長かった（水着を選ぶ所のみ）一日は平穩に終わったと思

い
ため息交じりで家に入った。

「ただいまー」

「おお、お帰り颯」

「母さん、珍しいなこんな時期に家にいるなんて」
俺の母さん。

とある会社の社長を務めている。

蘭 ひたぎだ。

どこまで引つ張ってんだこのネタ。

20代後半らしいが詳しい年齢は知らない。

でも、見た目は思いつきり大学生なんだよな。
若すぎるっていう……。

「いや、今日はある用があつて家に来た。すぐに仕事に戻るさ。」

「後、冬ちゃんは？」

「真冬は部屋に引きこもって」

俺が、要件を聞こうとした時、後ろから誰かが飛びかかってきた。

「あはは、これが颯か！」

「美香、うるさい」

「よ、よろしくですう」

「あ、後、今日からしばらくの間、こいつら3人の面倒を見てもらいたいんだが……」

久しぶりに言おう。

この言葉。

「ああ、不幸だああ」

そうだ 海へ行こう（後書き）

さあ出てきました新キャラ

詳しくは次回！！

感想も、待ってるよおq

騒がしい　そして　出発（前書き）

感想待ってます。

騒がしい　そして　出発

ええ、引つ張っちゃったよ。

次回に！！

もうどうでもええです…………。

「また、何故、唐突に！？」

「まあ、そう焦るな」

「焦るわ！！　なんで一気に3人の女の子と暮らさないと行けなくなっただよ。

原因を教える！！！」

そういつて母さんは話した。

「実を言つと…………このこら3人は　」

「ぐくつ…………」

つばをのむ音が異様に大きかった。

「私の子だ。」

「……………」

「さて、颯。首を吊ろうとするな、嘘、冗談、
f a k e f i c t
ionです」

俺はロープをおろし、母さんの方を見る。

「ちげええええよ!!!!!!」

本編のどこら辺で俺がロリコンになった。

あれか、理子といるからか？

アイツは高1だけど、見た目が中2だからなあ……………って納得すんな俺。

「…………まあ、いいけどよお。俺、明日から友達と海に行くんだけど？」

「そう、ならこの子達も連れて行って頂戴な」

「はあ？」

「だって私もう行かなくちゃ、あー、忙しい」

そいつって母さんは家を飛び出して行った。

……………

しばらく、家には閑古鳥がいたような気がする。

「まあ、よろしくね、みんな！」

開き直すことにした。

「よろしくな、颯!!」

「よろしく願います、颯さん」

「よ、よろしくう」

と、言うわけで家に3人の少女が居候するようになりました。

夕食後。

「はぁ、疲れる」

ここはお風呂。

何気に風呂はでかい。

母さんが『風呂は大きい方がいいのよ!!』と言った為だ。

「ふう……………」

一息ため息を付くと、ガタツと窓の方から音がした。

「ん？」

すると、美香、沙菜、寧々がバスタオル一枚で入浴してきた。

「ばっ お前達……………」

「颯には礼があるからな」

「泊めてもらう少しでもお礼を」

「し、失礼します……………」

おい、おいなんだよ。

この力オス。

結局、4人で入ることになった。

つてか、俺のぼせそう……………。

なんとか、こらえて……………つて、何を堪えたか逆に聞きたいくらいだけど

俺はぐだぁと部屋に入った。

「あ、芹菜に連絡しとかないとな……………」

徐に携帯を取りだし芹菜に掛ける。

『はい、芹菜でございます』

「ああ、芹菜か？」

『颯さん！！ これはどういったご用件で？』

「実はな、明日の海に行く件なんだが後、4人参加増えてもいいか？」

『はい、何の問題もありません』

「それはよかった。ありがとう、おやすみ」

『おやすみですわ』

ピッ。

ふう、疲れた。

俺は携帯を布団に投げ捨て、気が付いていたら目を閉じ眠りについていた。

翌日。

「ん……」

あれ、体が重い……筋肉痛？

そう思いながら、体を起こすと

「なー！！ 美香！！ 沙菜！！ それに寧々まで！！」

「ん」

「……おひゃようございます」

「……うう」

全員寝ぼけている。

あー、昨日ちゃんと部屋用意したのに……

「起きろ。」

そして2時間後。

俺達は無事、芹菜の指示に合った

あの時計台に到着した。

そして全員が驚いた。

「「「「「誰、その子達???」」」」」

その時、俺はただ顔をしかめるしかできなかった。

颯 「次回予告」

理子「颯くんが女の子4人連れてきました」

夜「こうしちゃいられない、すぐに警察に通報だ。」

颯 「まて、まて、まて、まて!!」

（夜の携帯を奪っている最中）

理子「で、結局、この4人は誰なんですか?」

湊 「さあ……親戚とかじゃないですか?」

炬「僕 参上!! (1時間の遅刻)」

理子「それは理子の決め台詞です、勝手にとらないでください」

(夜が警察に事情を話している最中、颯は必死に携帯を奪おうとしている)

瑞希「眠いよー」

芹菜「そうでございますね」

恋「あはは、このメンツは飽きないねえw」

知弦「この人達、何かずれている気がするのは僕だけでしょうか？」

颯「やったああ(夜の携帯を奪い切る)」

夜「く……負けた」

?「あれ、ここはどこですか？」

颯& a m p・美香、沙菜、寧々以外

「だから誰？」

颯「それは次回のみぞ知る」

理子「うわ、うまく閉めましたね」

秘密（前書き）

感想待ってます

秘密

今は芹菜の別荘へ向かう途中の新幹線。

今日はいい具合の快晴。

天気は良好だが……

ここにいるメンバーの気持ちは曇りである。

「なんで、人数が増えてる……」

「颯くんがロリコン、ロリコン、ロリコン……」

「理子は颯くんを見損ないました、理子と言う存在があらさ
らに」

4人の女の子にまで手を挙げたとは……」

「ちょ、ちょ、待ってストー……ップ……」

俺は大きく声を上げ、ぶつぶつ言っている女性陣を黙らせた。

「お前ら勘違いしてないか？」

そういった、俺の言葉はどこか嘘っぽく聞こえたらしい。

「言つとくけどアイツら3人は母親の知り合いの娘さんで少しの間
預かっているだけだ！」

「じゃあ、その隣で寝ている、金髪美少女はいったい誰ですか？
恋人……」

理子、知弦がおそろおそろ言ってきた。

みんなは俺に注目。

視線が……

「あれ、みんな知らなかったの？」

「てつきり知ってるのかと……」

恋と瑞希は顔を出して行った。

「お前達、知ってたのか!!」

「うん、だって私と颯くん、真冬ちゃんは幼なじみだし」

「僕は中学時代からの付き合いだからな、知っているぞ」
胸を張る2人。

何故、そこで威張る!?

「でも、全然似てない気が……」

「まさか、腹違い的な？」

「ちげえよ、双子って言っただろ」

隣の真冬はすやすやと寝ている。

その寝顔はまさに天使!!!!

「『『シスコン』『『

「誰だ!! 今、言ったのは言っちゃいけないセリフNo.1だよ
おお」

「うるさい颯、黙れ」

夜に怒られてしまった。

もう、疲れた。

ツッコミが

「で、この3人は？」

「だから、母さんの知り合いの子ども達で『俺の性奴隷だ』まで、美香」

「きゃっ／＼／＼／」

「きゃじゃねえ、後みんな全力で引くの止めてくれない？」

夜、芹菜、理子、知弦、湊さん、恋、瑞希はドン引きしていた。

炬は　　寝ている。

「違うよ、違うから、俺、こいつらと昨日初めて会っただけですからっ！！」

「まあ、いいですよ」

「人には知られたくない事の1つや2つや400くらいありますから」

「いや多いよね？　芹菜さん、どんだけ人に知られたくないこと多いんだよ！！」

はあ、はあと息を荒げる俺。

もう嫌。帰りたい！！

目的地に着いたらそのまま帰りたい。

泣きそうになってきた。

「…………ふあああ」

「どうやら、起きたようだぞ」

夜の一言で俺は我に戻った。

どうやら隣に座っている真冬が起きたそうな。

「おはよう、お兄ちゃ…………ってここはどこですか！？」

「ここは、新幹線の中だけどー！？」

「…………まさか、お兄ちゃんはついにシスコンに目覚めて私と駆け落

ち……そんな事、

でもお兄ちゃんとなら じゃ／／／

「結構な人数で駆け落ちしますね」

13人で駆け落ちです（笑）

「真冬、帰ってこーい」

ぺしぺしと頬を叩き、目を覚まさせる。

「初めまして、蘭 真冬と言います。お兄ちゃん……颯の双子の妹です」

礼儀正しい真冬

つてか常に話し方が敬語だからこれが普通なんだけどね。

「しっかりできた妹さんだ」

「それに比べて兄の方は……」

「そこ、近所のおばさんトークやめなさい!!」

夜と理子に注意をする。

「でも、それじゃあ僕達と同じ学年じゃないのか？」

「はい、真冬は南丘高校2年生ですよ。でも、残念な事に体が弱くて、あんまり学校に行ってないんですよ。それにクラスも2-Fとみなさんのクラスからは離れているのです」

「だから一度も見てないのか」

「はい、真冬は基本的に教室から出ないので」

「……………」

その時、夜は激しく賛同。

理子、知弦は俺の様子をうかがっている。

恋と瑞希はそれが普通な事を知っている。

芹菜、湊さんはうんうんと頷いている。何故!?

美香、沙菜、寧々はぽかーんとしている。

「あれ、みなさんどうかしたんですか？ まさか真冬、何か言っ
てはいけない事を口に……………」

「もう、言うな、何も」

俺は真冬の口を押え、うんうんと頷く。

こうして、散々な事があったが、ようやく芹菜の別荘へ着いた。

別荘な家よりも大きく、部屋が沢山ある。

そして肝心なのが

「第一回 部屋決め総選挙!!」

「いいいいいいい ぱふぱふ」

理子が超超超テンション挙げて言っている。

「え、こんなに部屋多いから1人1部屋じゃないの？」

「申し訳ありません、今は使われてない別荘ですので現状使える部屋は6つしかないんです」

え？ 6部屋。

「じゃ、じゃあ俺と炬は決定だろ？」

「いえ、理子は颯くんと寝たいので拒否します。」

「ええええ、何その、パンがないならケーキを……あ、やっぱパンを買ってきなさい的なやつ」

どうやら参加決定らしい。 南無。

ちなみにメンバーは

俺（颯） 夜 芹菜 炬 湊さん 理子 知弦

美香 沙菜 寧々 真冬 恋 瑞希

となっている。

最悪の展開は免れたいたので夜と芹菜 瑞希と知弦のペアは、なしとなった。

そしていざ運命の総選挙！！

結果。

1号室 美香 沙菜 寧々（最初から決まっていた。）

2号室 炬（何故かこの部屋のくじは1つしかなかった）

3号室 夜 湊さん

4号室 瑞希 芹菜 恋

5号室 理子 知弦

6号室 真冬 颯

「ちくしょおおおおおおおおおおおおおお」

「おつしやああああああああああああああああああ」

絶望する3人（理子 知弦 瑞希）

絶叫する俺。

助かった、妹相手なら気をへんにすることは、きつとないだろう。

「ふつ、もう決まった事だ。アキラメロ」

そついい俺は6号室へ入っていく。

入っていく瞬間、理子が『もぐりこんでやる』と言っていたが
気にしないでこう。

こうして、俺達の夏休みは始まった

颯 「次回予告」

炬 「来ましたよ。女子風呂の前に」

颯 「唐突!!」

炬 「やつぱり、旅行と来たら・・・だろ」

颯 「いや、修学旅行じゃねえし、それに男子、俺とお前しかいね
えんだからバレルぞ」

炬 「いいんだよ、それで少年はまた一歩大人になっていくのさ」

颯 「何その、主人公の師匠みたいなセリフ。お前、俺とタメだか
らな」

炬 「あはは、いいじゃねえか。ということでタイトルコール言っ
てみようか」

颯 & a m p ; 炬 「次回 いざ海へ……え、まだ行かない」

颯 「次回もだらだら」

炬 「気分はMAX」

いざ海へ……え、まだ行かない（前書き）

この小説も更新してきてはや2ヶ月は経とうとしています。

これも、ご覧になってくれている読者様方のおかげです。

どうぞ、これからも世界が平和でありますように……あ、本心です
を宜しく願います。

つきましては2ヶ月記念に特別会を書きたいと思うので

この作品で気になる質問等を募集したいと思います。

ぜひ、感想、質問のほどを宜しく願います。

いざ海へ……え、まだ行かない

夜。

夕食を食べ、各自、自由時間。

そして……………

「さあ、やってきました。ここは女子風呂です」

「何故！？ 小声」

そう俺らは…………女子風呂（露天風呂）の前にいた。

「男、俺とお前しかいないんだからすぐにバレるだろ」

「ふっ 甘いな。蘭同級生」

「何故、そこでめだかちゃん！？」

炬は女子風呂の前で堂々と言い放った。

「風呂なんぞは、覗いてくれと　あああああ」

はい、終了。

俺は炬を部屋に捨てて、6号室へ戻った。

6号室のドアを開けると、真冬がゲームをやっていた。

「お前…………」

絶句する兄。

「……………」

夢中な妹。

無言で続く会話？は慣れている。

蘭 真冬はネットの世界では『神』と崇められているらしい。
らしいと言うのは実際にそういう機会に遭遇したことがないからであって

けして、妹の神疑惑を否定しているわけではない。

最初は母さんの持ってきた試作品のゲームから始まった。

まだ幼かった俺は、あまりやる気がしないと断ったが真冬は一度やってみたいといい

やった所、思いもよらぬ才能を開花させてしまった。

それから真冬は実績に実績を重ね、最終的には全日本ゲーム大会で最年少（中1）で優勝した。

行きよいは止まらず、中2、3と続き高1も優勝、今年も狙うらしい。

そんな事をモノローグで語っていると、真冬がゲームの手を止めた。

「お兄ちゃん」

「なんだ？」

「真冬は重大な事に気づきました。」

そういつて立ち上がる真冬、純白のワンピースがフワフワとなびかれる。

「充電器を持つてくるのを忘れました。」

「真冬、1つ言ってもいいか」
「どうぞ」

俺は思いっきり息を吸いこみ

「心の底からどうでもいいいい」

その叫び声は、遠く離れた風呂場まで聞こえたと言う。
(後で、理子から聞いた。)

「えー、重要ですよ。充電器がないと真冬は残り2時間で死んでしまいます」

「残り2時間!? 結構速いですなおい!!」

そんな感じの兄妹の小競り合いは30分も続いた。

続いて俺と炬のお風呂のターン。
しかし、炬は烏の行水と言うのに当てはまり入って速攻、体を洗いものの3分で退場していった。

そう、今は1人ゆっくり浸かっているのである、

「ふにゃああ」

そんなふやけたバカらしい事を発しても誰も笑う奴はいないのである。

しばらくすると、カラカラと扉が開く音がした。
扉の先を見ると……………

「ま、真冬！？　なんで？」

「だって、さつき女子の人達はいった時、真冬だけ残されちゃって今はお兄ちゃんしかいないお風呂場に来たと言っわけです」

理論的には合ってるけど……

「ははん　もしかしてお兄ちゃんは妹に欲情しているんですか？」

「だ、だれが貧相で胸のない妹によくじよ　」

俺は驚いた。

妹が

タオルを巻いていないことに。

「ば、お前なんで……………前隠せよ」

「いいじゃないですか、真冬とお兄ちゃんは兄妹ですよ？何の心配もありません」

そっいつて一歩ずつ近づいてくる真冬。

「ちょ、ほんとに待って・・・」

鼻を押さえて、後ろにさがっていく。
しかし！！！！

「あだっ」

背中には、石が。

「もう逃げられませんよ、お兄ちゃん」

そつと、俺の体を触った。

ひいいい この子Sだ。

「待ってくれ、兄妹でそういうのはないだろ」

「……お兄ちゃんは真冬とじゃダメなんですか？」

ダメって……兄妹だし。

「まあ……兄妹だぞ、血が繋がっているし ってそういう問題じゃねえ」

すると、真冬は少しずつ後ろへ下がって行った。

「………なかったら」

「………妹じゃなかったら」

そんな言葉を呟きながら真冬はゆっくりと風呂を去って行った。

「なんだっ たんだ？」

俺の頭にはひたすら女心はわからないという概念が残ったままだった。

頭を拭きながら、みんながいる大広間に行くと理子がいきなり

「トランプやりましょう!!」

と、行ってきたのでトランプをやった。

そして、6号室へ戻ると、真冬が一足先に寝てしまっていた。

「・・・・・・・・」

俺は真冬の横に敷いてあった布団にもぐりこむ

小声で1言。

「俺はお前の事は好きだぞ。1人の女の子というのもあるし、大切なたった1人の妹ってものあるけどな」

俺は、そういつて眠りに着いた。

少し後に、真冬が俺の布団の中に入ってきて
小声で何か言っていた。

次の日はみんなで海だぁぁと叫んだが、外はあいにくの雨でした。

終り。

残り2日

颯「次回予告!!」

理子「結局の所、何も進展していません」

知弦「それに関しては三條に加担する」

瑞希「2人に同じく!」

真冬「真冬はちょっと進展した気がします」

颯「・・・そんな事より次回予告」

美香「あははは、楽しいな」

沙菜「美香、うるさい」

寧々「すいません、すいません」

颯「……すん。次回予告」

炬 「次回は、僕」

夜 「次回は、あれだ……うん」

芹菜 「今、何を話しているのですか？」

湊 （おどおど）

颯 「次回は……」

恋 「あの夏の日に起きた出来事を僕はきつと忘れない」

颯以外 「「タイトルながっ……」」

颯 「こいつら、仲良いのか悪いのか分からなくなってきた」

あの夏の出来事を僕はきつと忘れない(前書き)

2カ月記念を書きたいと思います

質問等受け付けていますのでぜひ書いてみてください。

あの夏の出来事を僕はきつと忘れない

うわぁ……タイトル、恋の言った通りになっちゃったよ。
どうすんの作者さん。

僕らまだ夏っぽい事何もしていないけど……

そんな俺の思いをはせながらも翌日は晴天であつた。

昨日の悪天候は嘘のように晴れて、僕達は海へと走って行った。

芹菜のプライベートビーチゆえに誰一人していない。
スゴっ！！ さすが、お嬢様やな

「わ
」

「きや
」

「チエリオ
」

「340円
」

みんながそれぞれ叫びながら、海へと飛び込んで行く。
何故か後者の2つは叫び声ではない。

それから約3、4時間の間、俺達は灼熱の照らす砂浜ですつこい泳いだ。

これを文章にすると色々とめんどくさくなるので割愛。

夕食後、僕らは部屋でのんびりとしていた。
もちろん、真冬は予備で持ってきていた充電パックでゲームをしている。

しかし、突然と言う物は本当に突然やってくる。

P m , 1 0 : 0 0

僕らの部屋が突然開き、そこには息を荒く挙げた夜がいた。

「はぁ……はぁ……。せ、芹菜が」

僕は片目を閉じている。
その行動には意味があった。

「　誘拐された。」

やはり

その言葉が頭を駆け巡る。

「す、すぐにけ、警察を・・・」
「いや、少し待ってくれ」

額に手を当てる。

考える事3分
夜の息も整ってきた頃。

「犯人に会ったか？」

「いや、芹葉は少し外へ出ると行っていて、玄関にこれが」

夜は俺に一枚の紙を渡した。

その紙には、丁寧に新聞紙から切り取ったなんとも定番の脅迫状であった。

「恐らく、こいつらは『BACK』だな」

「BACK？」

「ああ」

その言葉をした瞬間、真冬の手は震えだしていた。

僕は立ち上がり、夜の耳元で

「ここには真冬がいる。一度、俺のいう奴を集めてくれ」

場所は変わって大広間。

ここには今

俺、夜、炬、知弦、瑞希、恋がいる。

俺は椅子から立ち上がり、1言。

「この脅迫状を置いたのは間違いなくBACKだ」

「颯、質問！！ BACKって誰だ？」

炬が手を挙げ聞いてくる。

「BACKはこの周囲を活動としている犯罪者集団だ。そして、俺と真冬が7歳の頃こいつらに誘拐された」

俺以外の人は啞然とした。

当然、このことは俺と真冬、かあさんしかいないのだから。

「俺の額には傷がある。これはその時に銃弾をかすめた後だ。」

「でも、その脅迫状だけでBACKと確定するには早くないか？」

「いや、あいつらだ。なんせ、俺らを連れ去った時と脅迫方が似ている」

バンツと近くの机をたたく。

「要求はもちろん金だろうな……要求が成立する前に奴らをぶっ潰す」

「で、でも……銃とか持ってたりはし、しないの？」

「あいつらは銃を持たない。いや……正確に言うて持てないか」

「何故？」

「そこまでは知らないが、俺達の時リーダーの奴、それも小さい

ハンドガンだけだった」

「と、いうことは？」

「ああ、強行突破だ」

その言葉に全員は驚く。

「でも、颯さん。生身の人間と武器を持った奴らでは勝ち目がありません」

知弦が言った。

「大丈夫だ、策はある」

俺がそういった後、後ろの方から誰かがやって来た。

「くふふ、ここでやっと理子の本当の力を見せる時が来ましたね」

「「「理子」「」」

「R N oの中でも最強と言われた発明品。N o / 0 0 1 2 4 2
5 8 9 6 4 4 4 4 4を持ってきました。」

そいつって理子が持ってきたのは

N o / 0 0 0 1 ブレインマシン（トラス オーマー）
N o / 2 4 2 触れるだけで人を殺せる並みの電撃を放つ

スタンガン

No. 5896

名刀 春雨

No. 4444

no name

「これらを使って、奴らを潰す。しかし、俺達の目的はあくまで芹菜の奪還だ」

「おう」

「ここにいる全員の力を合わせて、奴らを潰す」

「おう」

「理子、奴らの居場所は!!」

「はい、ここから約5kmのアジトにいる模様です」

「了解した。ではオペレーション『芹菜奪還作戦』」
star

「「「「おおおおっおお!!!!」」」」

俺の手には n o n a m e

知弦の手には名刀 春雨

理子と夜にはブレインマシン

他の者にはスタンガン

これは戦争だ。

死を奴らに味あわせてみせる。

美香「次回予告!!」

沙菜「私達が寝ている間にえらい目に!?!」

寧々「き、きづきませんでしたぁ……」

湊「わ、私は戦力外……」

真冬「もう思い出したくない過去」

颯 「俺が、てめえらの幻想をぶっ殺してやる」

炬 「シャイニングフィンガー」

理子「パクリキタ \ (^ o ^) / 」

夜 「不服だが、奴は私達の仲間だ。仲間を見捨てる奴にこの部に入る権利はない」

知弦「どこまでも……地獄でもお供します。颯さんっ!!」

恋 「次回、過去の因縁」

瑞希「どうでもいいけど、颯くんキャラ変わってない?」

颯 「この事件が終わったらきつと戻るっ!!」

芹菜「待ってますわ」

過去の因縁（前書き）

結局、質問1通も来なかった（泣

でも、感想は待ってます。

夏休み編最終話

過去の因縁

某場所

俺達は扉を蹴り倒した。

「ここが貴様らの墓場だ」

俺は手を広げて、そう言い放った。

「て、てめえら何もんだ!!」

「さてな、偶々通りかかったヒーローとでも言うておくよ」

数人が立ち上がり、僕らを攻撃しようとする。

「理子!!」

「がってんしょうち」

「ぐが……なんだこのロボは」

ウィイインと外からロボットの手が出てきて1人を掴み投げ飛ばした。

足早に進んで行く俺らを尻目に、BACKのメンバーは攻撃を仕掛けてくる。

「う………うわああああ」

バチィッ

スタンガンで気絶をする者。

「こ、このクソがきがああああ」

ドスッ

レプリカの刀で気絶する者。

次々と戦力は無くなっていき、最後には幹部と思われる2人の人のみ残った。

「てめえら、覚悟は出来てんだよなあ」
1人の男が拳銃を前に出した。

「逆に問う。お前には、その拳銃で人を殺せる覚悟はあるのか？」

俺はみんなを後ろに下げ、1人歩いていく。

「く……くるなあ」

「お前には用はない、俺の用はたった1つ 芹菜を返してもらう事だ。」

「くるなあああああ」

バァァン

渴いた そんな 音が 古い 廃工場に 響いた。

「はやてえええええ」

誰かの叫ぶ声が聞こえたのが分かった。

銃弾はそのまま後ろへ逸れていき、天井近くに突き刺さった。

「撃ったな 撃ったよな なら、俺に殴られて、殺されても文句はねえはずだ」

そういつて僕はno nameと書かれたグローブをはめる。

「俺達はなあ、残念だ……とても とても でも、お前らのようにクズには
なりたくねえと誰もが思っているさ」

助走を付け、走り出す。

男は動揺しているのか、引金でためらっている。

「その1秒の覚悟の違いで運命が変わるんだよ」

俺は思いっきり、足を付け振り絞るように力を込めた。

「これが俺とお前の覚悟の差だあああああ!!」

顎を思い切り殴った。

反動で男は宙を舞い、空を飛んだ。

近くに会ったドラム缶の山に飛び込んで行き、気絶したと思える。

「後1人」

ボソツと呟いた。

その後ろから

コッ

コッ

と、足音が影のある先から現れたのは

「久しぶりですねえ……蘭 颯くん」

上下スーツを着て、いかにもサラリーマンみたいな恰好をしている
20前後の男が俺の名を呼んだ。

「ああ、何年振りだっけなあ。鳳凰^{ほうおう} 臥仁^{がじん}さんよお」

「いやですねえ、僕の名前を憶えているなんて」

「黙れ。」

「その辺に関しては置いといて」

「黙れ。」

「ああ、そうでしたね。アナタのお友達 右坂 芹菜さん。後ろの
部屋で寝ていますよ」

「黙れ。」

「なんですか、その十年ぶりに会った」

その時、きつと俺以外のみんなは驚愕したと思う。
背筋が凍るような。
そんな感じ。

「叔父に対しての反応は」

そう、こいつ鳳凰 臥仁は俺の父親の兄貴
おじさんという親族に当たる。

十年前、俺と真冬が誘拐された時、
何故、そんなあっけなく誘拐されたのかと言う点に関すれば
この答えが1番当てはまるであろう。

叔父が誘拐犯なわけがないという点から甘かったのであった。

叔父は

天才であった。

「今から、てめえをぶん殴る」
「それは、それは頑張ってくださいね」

俺はそいつの言い分を聞かず、走り出した。

いきよいよくついたパンチは空気抵抗をさせず100%の力でぶつ

かっ
てい
く。

その
まま
臥仁
に殴
りか
る

「痛
い
で
す
ね
え。
で
も

「そ
ん
な
ん
じ
ゃ
僕
は
傷
1
つ
付
き
ま
せ
ん
よ

そ
う
い
っ
て、
臥
仁
は
俺
を
投
げ
飛
ば
し
た。

「颯、
僕
ら
も
参
戦
し
た
方
が
」

「止
め
て
お
け、
アイ
ツ
は
人
が
多
け
れ
ば
多
い
ほ
ど
強
く
な
る。
」

「ど
う
い
う
……」

「あ
い
つ
は
天
才
だ。
頭
が
切
れ
す
ぎ
て
可
笑
し
い
ん
だ。

「一
周
回
っ
て、
バ
カ
だ
け
ど
な

「さあ、余興はこれまでに最後にサプライズが待っていますよ」

そういつて、臥仁は左ポケットからスイッチをだした。

「みんなあああ、ふせろおおおおお！！！！」

俺の言葉を聞いた瞬間、みんなはとっさに飛び込んだ。

その姿を見て、臥仁は笑い1言

「今回は、これくらいでいいでしょう。」

「いつか、また会える日を甥よ」

ピッ

ドツカアアアアアアン

その瞬間。狭い廃工場は巨大な爆発を起した。

それと同時にこの戦いにも終止符が打たれた。

俺が気が付いたのは、病院のベットの上。

その後は、次々と飛び込んできて再び入院と高校2年の夏は病院で過ごした。

結局、鳳凰 臥仁の行方は分らず仕舞い。
身代金も渡さず、逃げ、わからない。

あいつは、考えのわからない男だった。

今宵は満月

病院のベッドの上では颯さんが眠りに着いていますわ
助けてくれて、ありがとう。

その言葉を言いたくてわざわざやってきましたの
だから、言わせて

ありがとう

私はその言葉を呟いた後、そつと颯さんの頬に唇をつけた。

そつと病室から出ると、近くにはSPがいた。

「お嬢様、大丈夫でしたか？」

「ええ、今回はあの方に一手買ってもらいましたので

「彼は今回、何もしていませんの

「ありもしない事実をでっち上げ
「覚えているはずのない十年前の誘拐事件の犯人にし
「記憶にない言葉を植え付け
「まったく、あの方 鳳凰 臥仁と言う人は凄い人ですわ
「やっぱり凄いのね、I P Fの方は……………」

私は病院を後にしました。

次に会うのは夏休み明けですわ

楽しみにしていますわよ 蘭 颯さん。

颯 「次回予告」

夜 「それにしても、あの事件は忘れられんな」

芹菜 「そうですわね」

炬 「ようやく、夏休みが明けた少し後のお話だぜ」

理子 「な……………な……………なんと！！ 文化祭 いい響きで
す」

瑞希 「だよね！！ 去年は颯くんと回ったよあゝ 今年もぜひ
ぐふふ」

颯 「今、おぞましい声を聞いた気がするんだが」

知弦 「いや、今年は僕と回りますよね、颯さん！！」

理子 「いえ、理子とです」

瑞希 「いや2年連続私だお！！」

(3人でいざこざやっている)

颯 「ちなみに美香、沙菜、寧々は帰りました。」

美香、沙菜、寧々 「まったく、出番がなかった」

恋 「作者もなんでこのキャラを作ったのかいまだ不明だってさ」

颯 「そんな中の人の事情を言われてもねえ……」

真冬「特別企画 これまでの解散部を反省しよう」

颯 「そういえば、この部活解散部って言ったんだっけな。忘れてたわ」

颯 「後、質問1通も来なかったらしいな。」

流石、超マイナーな作品。 見ている読者なんていないぜ!!」

作者「死のう……」

全員「それだけは!!」

藩制？ 半生？ 反省？ 回！！！（前書き）

今回は、雑談です。

場所は夏休み中の病室。

さて、どんな話が繰り広げられるのか！！

感想待ってます。

藩制？ 半生？ 反省？ 回！！！！

颯「と、いう事で第1回 解散！？ 反省！？ どっち！？ そんなの関係ないんかい！！！！！！」

全員「いええい！！！」

颯「と、まあ始まった今回の反省会 と、言いたい所だが・・・何故、俺の病室なんだああ」

理子「いや、だって颯くんも一樣部員ですから」

颯「一樣って！？ 俺って仮部員だったの？」

夜「まあ、その辺は置いといて」

颯「置いとけるかああ！！！」

炬「朝からテンションたけえな」

知弦「流石、颯さん。いつ何時でもツツコミはさえています」

瑞希「流石、私の未来の旦那様・・・いや、現在進行形！？」

颯「俺はツツコミになった覚えはねえし、お前の旦那にもなった覚えはねえよ」

瑞希「えー」

颯「えーじゃねえよ！！！」

（ガヤガヤ ざわざわ ぞわぞわ）

颯「で、具体的に何すんの？」

俺以外「えっ（。。。1111）」

颯「何故、みんな同じリアクション！！ しかも絵文字仕様」

湊「えっ……と……・・・」

夜「湊さん、こっちです」

炬「みなっち、おっはー」

湊「おはようございます」

颯「いつから俺の病室は部室になったんだ」

理子「いいじゃないですか」

知弦「今回のテーマは!!」

バンッ

炬「反省会。」

颯「いや、さっきやったから」

夜「と、いう事で今までの反省をしよう。まずはお前からだ、颯」

颯「えー、俺かよ……俺の反省って言えば、解散部に入った事だけださ」

・・・。。

颯「え？ 何故、沈黙。嘘、今は無し。」

・・・。。

颯「あ、沈黙だ。」

瑞希「思っただけで、私解散部のメンバーじゃありません」

夜「そういえばそうだったな。」

芹菜「良いではありませんか、同じ部活と言うのも面白いものです」

夜「いや、私は否定しておらんよ」

理子「1年生は理子しかいませんね」

颯「また、唐突に・・・そういえば、理子以外にも解散部には1年生2人いるんだろ？」

夜「ん？・・・ああ、まあな。だが入部届を出したきり一回も来てはおらんぞ」

理子「どんな人かとても興味があります（内心 ドキドキ）」

炬「たしか2人共、女の子だったよな」

颯「この部活、女子率高くないか？」

夜「お前と炬以外女子だからな。一樣高いな」

瑞希「この学園の男子は大体運動部に入っていたりする。」

颯「いや、そこで雑学を出されても・・・」

閑話休題

瑞希「そういえば、恋ちゃんと真冬ちゃんは？」

颯「真冬なら、毎度の如く家でゲームだ。恋は……除霊とかやってるんじゃない？」

知弦「そういえば、恋……さん？ でしたっけ、あの何者なんですか？」

夜「そうだ、私は夏休み前に彼女が1人で話している所を目撃したぞ」

芹菜「そういえば、私も見たことが合ったりなかったり……」

理子「悍ましいです……」

颯「恋は家が代々続く、霊媒師的な者らしい……詳しくは聞いたことないけど」

知弦「とても気になる・・・」

炬「今、ちよつと電話してみたら？」

颯「そうか？ それほど重要視する話題かこれ？」

颯、瑞希以外「そりゃあ、もう!!」

瑞希「なんでみんなテンション高いの!？」

颯「まあ、いいけど・・・」

ブルブルル（呼び出し中）

ガチャ

颯「あ、俺だ。颯だ……えっ？　今……吸血鬼と戦っているから……後にくれ？」

「わかった。無理はするなよ」

•
•
•
•
•
•
○

颯「ん？ どうしたお前達」

[illegible]

理子「なんですか、吸血鬼って」

炬「あれか！！ 某物語的な？」

夜「それともこの作者が書いている作品か？」

颯「炬と夜、それはメタ発言だ。後、夜の方はまだ出てきていない！！」

知弦「と、いう事はこの世界での話と言う事ですか。颯さん」

颯「だから、元々そういう事は知らないんだよ俺達は」

湊「戦場が『ストップ湊さん』え？」

颯「まさか、湊さんの口から出てくるとは思わなかった」

湊「そう……かな？ 私、本読むの好きだから……」

颯「一樣、この作品ではあれ物語は出版されていない設定です」

炬「俺……この任務が終わったら結婚するんだ」

颯「完全なる死亡グラフっ！！
性がない！！」

そして、今の話にまつた多くの関係

夜「颯……疲れるだろ」

颯「ああ、お前らと付き合っている時、いつも思っているよ」

話題変更

炬「もし僕らがアニメ化したらどんな声？」

（拍手 歓声 パフパフ）

颯「また唐突に、それにメタ発言キタ（。）。」！」

炬「お前、どんどんキャラ崩壊していくな」

颯「なら、そんな話題をだすな」

炬「僕の声は 島 宙さん希望！」

颯「それ伏字の意味ねえよ！！ 声優さんで宙付くのそうそういいよ！？」

夜「なら私は井上 麻 奈さん希望だ」

颯「もはや伏字になってねえよ」

結局そこから30分間 自分の声にしたい人を言い合った。

瑞希 広橋 さん

理子 伊 か 恵さん

知弦 佐 利 さん

湊さん 小 ゆ さん

芹菜 田 ゆ りさん

らしい。

ちなみに俺の希望は木 良 さんだ。

みんな当ててみようwww

閑話休題
話題変換

颯「で、次は何を話すんだ？」

瑞希「そくだよねえ、まだ原稿用紙4枚しか書いてないもんね」

颯「そういう発言はやめろっ！！」

炬「質問も受け付けただけど1通も来なかったし」

颯「止める！！ 作者はそれで結構へこんでんだぞ！！」

夜「まあ、いい機会だからお互いに質問してみるのもいいもんだな」

と、いう事で

炬「今さらだけど、アナタに質問！！ 質問攻め！！！！」

颯以外「いえええい！！」

颯「どうでもいいけど、なんでタイトルがバラエティー番組風なの？」

炬「始めました。さて、まず最初に質問するのはこの方！！」

瑞希「はい！！ 質問、颯くんはぶっちゃけ誰を選びますか？」

颯「ぶっちゃけすぎだ・・・」

炬「はい、颯さんお答えください」

颯「なんでだよ……えっと、ぶっちゃけ言つと俺はあんまり恋愛感情とかはないんだ。」

けど、しいて言えば隣にいて安心する人かな・・・？」

瑞希「・・・ッ」

颯「何故、舌打ち！？」

数人（話を濁しやがったか）

颯「 の数人って約3人の後ろから禍々しいオーラが出ているんですけど」

知弦「そんなことは気にせずに」

理子「次へ行きましょう」

颯「あ、息が合った」

夜「私からだ。ぶっちゃけ、1年生に2人、2年生に1人部員いるけど、それってただ単に

ネタが浮かばないから出てこないだけなんじゃないのか？」

颯「それって俺じゃなくて作者さんに質問してんじゃないか」

炬「で、その答えは」

.....。

颯「そりゃそうだよ。作者さんが言うわけねえし、これもメタ発言だし」

夜「ならいいや」

颯「質問の締めはやっ！！」

炬「次の質問者は」

湊「.....はい」

炬「ではどうぞ！！」

湊「あの時、言えなかったけど.....颯くん、あり.....が.....と」

.....。

颯「え、なに？ その表情。待つて、瑞希文房具は止める。痛いから、シャーペンに勘弁。

目は.....俺の目って某物語みたくな直んないからあああああ」

颯「ぎやあああああああああああああ」

夜「どうやら2人は間違った解釈をしたようだな」

炬「そりゃあ、みなっちが頬を赤らめて礼を言ったらねえ」

颯「おい.....。その2人、なに近所のおばさんトークして

んだ。助けて・・・」

看護師「うるさいですよ。ここは病院です!!」

・・・。

俺はこれがかっかけで治りかけていた傷が再び開き、夏休みを棒に振るという結果になった。

閑話休題
話題交代

颯「で、次は？」

理子「もうぶっちゃけないです」

知弦「僕も正直、疲れました。」

颯「お前らなんもやってねえだろ」

夜「私は帰るぞ」

炬「僕も腹減ったし、帰るかな」

湊「なら・・・。」

瑞希「あっさりと帰ります」

スタスタと帰っていくみんな。

1人残る俺。

・・・ダメだ、ここで泣いちゃいけない。

そう思つて、布団を被つたらドアが開く音がした。

布団を上げ見ていると、そこには湊さんの姿が

「どうしたんですか？」

「私は臆病だ。何をやっても1人前にはなれない、でも……」

俺の方へ向かつてくる湊さん。

その姿は決意を決めた戦士の如く。

「もう私は逃げない」

湊さんはベットに手を付き、俺の唇にそつと自分の唇をつけた。

「わ、私が……初めてなら………謝ります。」

ぴゅーと風の如く去つて言った。

俺は何が何だかわからず放心状態。

こうして、俺の夏休みは幕を閉じた。

今度、みんなに会うのは夏休み明けである。

颯「次回予告」

湊「・・・お久しぶりです」

颯「湊さんが次回予告に来るなんて珍しいですね」

湊「・・・いえ、みなさんどうしても用事があつて抜け出せないと言ふ事で」

颯「そういえば、そろそろ文化祭ですね」

湊「・・・私にとっては最後の文化祭です」

颯「そういえば、湊さんは3年生でしたね」

湊「今年は思い出をたくさん作りました。颯くんに出会ったのもその1つです」

颯「そうですか、それは良かったです」

湊「・・・そ、それで、折り入って頼みがあります」

颯「はい？　なんでしょう？」

湊「わたし……私と……ぶ、ぶんかさ」

？「あ、ここにいたよ。湊、ちょっと用があるからこっちへ来てくれないかな？」

湊さんが謎の3年生に連行されていく

湊「あれ」

？「君が、颯くんかい？　話は湊から聞いているよ。」

颯「ええ・・・まあ」

？「私の事は詳しくは次回で会おうさあ」

？「次回、新キャラ謎の3年生と新入部員。お楽しみに」

颯「は！！　タイトルコール盗られた」

自己紹介 蘭 颯 A r a r a g i H a y a t e (前書き)

タイトル変えてみました。

これからもよろしくお願いします。

ここからしばらくは自己紹介です。

振り返って見ましょう!!

自己紹介 蘭 颯 A r a r a g i H a y a t e

「はい、俺の自己紹介」

Q 名前と学年とクラスは

あーらーはーやーしー
「蘭 颯だ」

「高校2年生 2 - A組所属」

「このクラスは夜、炬、知弦と同じだな」

Q 身長、体重その他

「身長は172cm」

「体重は59kg」

「誕生日は6 / 17だ」

口癖は「ああ、不幸だ」

「そういえば、最近言っていないな……（夏休み辺りから）。もしかや、幸運に近づいているのか!!」

Q 自分ってどんな感じ？

「襟足以外は基本的に黒髪だ。前髪は右目が隠れるくらい。」

襟足のみ白に染めた。なんでかって？いや、かつこいいと思ったからだけ……」

「それに、何故かクラスの女子達からは女装を薦められる……。俺、その内泣く気がする」

「顔は童顔らしい……童顔って何？ 瞳は青色だ。けれど、普通に日本人だけだな」

「子ども頃からよく不幸に会っていたから、以外と体は丈夫なんだよなあ……特に中学校は酷かった……」

Q その傷ってどこで付いたの？

「この右頬の傷は中学の頃の歴戦の後……って思っておいてくれ。額の傷は思い出したくもない十年前の誘拐で出来ちゃった……」

Q 妹ちゃんの事、どう思う？

「え……、妹って大事だろ？ それを世間ではシスコンって言うのか……」

それは、妹がいない人のへりくつだ。妹がいれば誰でも大事にするさ」

Q 好きな人は？

「好きな人はいないけど……しいて言えば、隣にいて安心する人だな。」

あ、ここは重要。マーカーを引いてくれ、俺は髪の長い子が好みだ！！」

Q 解散部ってどう思う？

「解散ぶなあ……、いや、これから本編を見る人には失礼かもしれないけど、
入って見たはいいものの、そんな日常的には対して変わってないんだよな……。変わったと言えば、
友達が、話せる人が少し多くなって学校が面白くなったってくらいだな。」

Q 成澤 瑞希さんについてどう思う？

「……………ノーコメで」

Q それでは最後に1言

「もう最後か……。これを見ている読者さんは一通り見ている人かもしれないし
これから、見る人かもしれないけど、この作品は俺達の残念な所を捨てるべく立ち上がった
物語だ。見て損は無いし、見なかったらそれで損はあると思う。
見てくれたらぜひ感想をくれ。とても嬉しい」

Q 今日はありがとうございました。

「ああ……やつと解放された。……って瑞希さん……。何故ここに
えっ？
なんで私の時はノーコメントなんだって？ そ、それは
ぎゃああああ」

あらら、どうやら見つかったようですネ。

「ああ、不幸だあああああ」

一様、主人公ですので、あしからず。

続いては、さきほど出てきた成澤 瑞希さんの自己紹介です。

自己紹介 成澤 瑞希 Narusawa Mizuki

「はい、次は私だよー」

Q 名前と学年とクラス

「名前は成澤^{なるさわ} 瑞希^{みずき}だよー。」

「学年は2年生 2-B所属。芹菜ちゃんと同じです」

Q 身長 体重その他

「身長は156cm 体重は40後半。誕生日は7/7だよ。」

Q 3サイズは？

「それは…颯くんにしか教えませんっ!!」

Q 蘭 颯とはどういう関係？

「幼なじみです。そして未来の旦那様……きゃー」

あ、あの…自分で言っただけで悶絶しないでください。

Q 特徴は？

「髪の毛は桜色で腰まで、前髪はパツン。」

Q 蘭 颯と他の女子がもし話していたら・・・

「ふふふふ・・・その女。クロス」

すいません、何処からともなく文房具を出さないでください。

Q もし、蘭 颯と他の女子が手を繋いでいたら・・・

「ふふふふふふふふ」

すいません、答えになってないですし、何故か目が真っ黒になっています

Q では質問を変えましょう。もし、蘭 颯と結婚できたら

「ぶはあああ」

ええ！！　そこで何故、鼻血がでるんですか！！

「ごめんなさい、ついあっちの方を想像したので・・・」

どっちですか・・・

Q それでは最後に1言

「颯くんにごく女 全員 クロス」

解散部の女子メンバー逃げて

以上 成澤 瑞希さんでした。

次回は解散部 部長（仮）の日笠 夜さんです。

自己紹介 日笠 夜 H i g a s a Y o r u

「次は私か。まったく不愉快になるな」

Q 名前と学年とクラス

「名前は日笠^{ひがさ}夜^{よる}だ。2年生で2 - A組所属だ。」

Q 身長 体重 その他

「身長は164cm 体重？ そんなもの聞いてどうする？ 誕生日は8 / 12日だ」

Q 特徴は？

「特徴と言ってもな……私は普通だ。黒髪に腰まで伸びていて、前髪は横一線だ。」

Q 友達が少ないって本当？

「ふん。別に少ないと言うほどではない、ただ自分に合う奴らが少ないだけだ。」

それを世間一般では友達が少ないって言うんですけどね

Q 解散部をどうして立ち上げた？

「解散部か？ いやな、我々は残念だ。世間から少しはみ出ている

者達である。

その奴らを集めて、互いの残念な所を解散、すなわち離れるようにと努力すれば・・・と思つてな」

Q 部長なんですか？

「いや、この部活に部長、副部長はいない。まあ、形上私となっているが部長だと思つたことはない。」

Q 練馬 炬とよく話している所を見かけますが？

「ああ……あいつは、よく話しかけてくるな。別に嫌いではないがああいう奴を見てるとイライラしてくる。このリア充が!!」

Q 好きな人とかいないんですか？

「べ、べつに・・・い、いないぞ」

めっちゃ動揺しているやん。

Q 最後に1言

「うむ、自分に残念な所があるやつ、ぜひ解散部へ来い。私達は歓迎しているぞ」

ありがとうございました。

次は解散部1バカの練馬 炬さんです。

自己紹介 練馬 炬 Nerima Kagari

「はい、はい次は僕の出番かな？」

Q 名前と学年とクラス

「僕は練馬^{ねりま} 炬^{かがり} 2年生で2-A所属だよ。」

Q 身長 体重 その他

「身長は172cm 体重は知らんなあw 誕生日は2/23だよ」

Q 特徴は？

「特徴はなんといっても、この金髪！！丁寧に磨きかけられた金色で見事に立っているツンツンヘアー。」

Q 運動神経いって本当？

「本当だよ、」

Q バカって本当？

「本当だよ、毎回赤点だらけだね。」

Q モテるって本当？

「本当だよ、月に……1、2回は告られるね。」

Q で、今は誰とも付き合っていないの？

「付き合っていないよ、心配な奴がいるからね」

Q 自分のことは心配じゃないんですか？

「え？ 僕は心配な要素はないけど・・・」

そのバカな所は心配な点じゃないんですね

Q 日笠 夜とはどうやって知り合った？

「夜は、中学の頃からだよ。この学校、中高一貫なんだけど、中2の時同じクラスになって、それでなんかあの子気になるなあって」

Q それが俗にいう恋では？

「いやあ、それはないよ。夜は綺麗だけど、僕ってあまり恋愛とか一括りでまとめたくないんだよね」

バカのくせによく言いますね

「あはは、よく言われるよ」

Q 解散部の他にも友達はあるの？

「うん、いるよ。結構ね。たまに練習試合にでってくれとか頼まれるし……」

Q 最高何点取りましたか？

「テスト？ 10教科で最高が120点かな」

単純計算で1教科 12点……破滅的ですね

Q それでは最後に1言

「僕はバカだけどカンは鋭いってよく言われる」

それはバカなら誰しもが言われます。

ありがとうございました。

次回は大金持ち？ 右坂 芹菜さんです。

自己紹介 右坂 芹菜 Migizaka Serina

「よろしく願いますわ」

Q 名前と学年とクラス

「みぎざか 右坂 せりな 芹菜でございますわ。2学年で2 - B所属。
瑞希さんと同じクラスですわ」

Q 身長 体重 その他

「身長は159cm 体重はわかりませんわ 誕生日は12 / 1で
すわ」

Q 特徴は？

「背中まで伸びる銀髪に瞳は青ですわ」

Q 3サイズは？

「いえ、最近肩がよく凝りますわ」

死ね、 B y 夜

Q お金持ちって本当？

「ええ、お金持ちかどうかは知りませんが、世間がお金持ちと言っ
たらそうですね」

Q 父さんは会長さん？

「はい、お父さんは右坂^{みぎさか} 偉人^{いくと}といい、現時点でも会長兼社長ですわ」

Q 家は大きいの？

「さあ 他のお宅にはあまり言った覚えはないのでわかりませんが
メイドが3人
執事が2人いますわ」

Q 蘭 颯宅も大きいとの噂が・・・

「そうですね、颯さんのお家も大きかったですわね。お母さんが
どこかの社長だとか」

Q 最後に1言

「そうですね。ここまでご覧くださってありがとうございます。
これからも解散部を宜しくお願いしますわ」

解散部の部費つてもしかして右坂さんが出しているんですか？

「それはどうでしょうかね？」

ありがとうございます。

次回は解散部唯一の3年生 菊池 湊さんです。

自己紹介 菊池 湊 K i k u t i M i n a t o

「よ……………よろしくお願いします」

Q 名前と学年とクラス

「えっと……………きくち みなと 菊池 湊と言います。
学年は3年生 3 - D組所属です」

Q 身長 体重 その他

「し、身長は150cm た、体重！？ そんなの恥ずかしくて言えません！！……………
す、すいません。取り乱してしまって、誕生日は11/28です。」

Q 特徴は？

「ちゃ、茶髪でウェーブがかかっています。高校生になってかけました……………
髪は短いです……………」

Q 蘭 颯さんの事をどう思っている？

「は、颯さん！？ 颯さんは……………解散部のメンバーです……………
……………」

でも、唯一男子で話せる人ですよ？

「そういえば、私男性恐怖症でした。最近は颯さんとよくお話しす

るのでまったく忘れていました」

Q でも、颯さん以外の男性は話せないと

「はい、練馬さんも最近は少し……ほんの少しだけならお話できるようになりましたが
気軽に、気さくにお話できるのは颯さんだけです」

Q トラックに轢かれそうになった時、颯さんに助けて貰いましたよね。

その時、どう思いましたか？

「ど、ど、ど、どうって……内心、私は死んだと思いました。轢かれて……」

これで死んだんだ。あつけない人生だったと。でも、実際は生きてました。

颯さんが助けてくれて、その時に「

その時に？

「な、な、なんでもありませんっ！！」

Q 怒ってしまったので最後に1言

「さ、最後にですか？ 私は後半年で卒業しましたが解散部は終わりません」

ありがとうございました。

次回は自称発明家こと三條 理子さんです。

自己紹介 三條 理子 Sanzyou Riko

「理子 参上!!!」

Q 名前と学年とクラス

「三條^{さんじょう} 理子^{りこ}です。1学年生で1 - A組に所属しています」

Q 身長 体重 その他

「身長は147cm 体重はわかりませんっ!! 誕生日は2/9です」

Q 特徴は

「なんといつても、赤みがかったこの髪!! 毎回髪型は変わるの
で特にこだわりはありませんが
この赤髪だけは変えていません。なんてったって、あの颯くんに褒
められたんですから」

Q 颯さんに会ったと言う事は受験日当日ですか？

「そうです!! あの日、あの場所で理子は迷っていなければ、
颯くんの恋の迷宮に迷ってはいなかったでしょう」

なんか、上手いこと言っている気がする……。

Q あの後は受験を受けたのですか？

「はい、もちろん。理子は天才にして秀才ですので簡単でした」

Q そんな設定ありましたっけ？

「設定ではないです。デフォルトです」

そうですか。

Q 自称発明家ですが？

「自称ではありません。一樣、日本博士同盟会というものの会員です」

初めて聞いた！？

Q では凄い人なんですね

「そうです、理子は凄いんです」

Q 話は変わりますが颯さんのことをどう思っていますか？

「颯くんは理子にとっての王子様です。神です仏です」

いや、仏なら死んでいます。

「そうでしたね、すいません。理子は颯くんのおかげで友達も出来ました。えっと……たしか名前はま、ま、ま y 「

そこまで、これ以上先は次の話に関わりますから。

「そうですか、でも理子は本当に心の底から颯くんを好きだと言えます」

Q 最後に1言

「颯くん、ぜひ理子と文化祭回りましょう。そして、夜は……ぐへへ」

卑猥な暴言がでしたのでカットさせていただきました。

ありがとうございました。

次回は元不良 元一人狼の狼神 知弦さんです。

自己紹介 狼神 知弦 Rougami Tiduru

「ぬ？ 次は私か」

Q 名前と学年とクラス

「狼神^{ろうしんがみ} 知弦^{ちしん}だ。学年は2学年 2 - A所属だ」

Q 身長 体重 その他

「身長は170cm 体重はわからないな 誕生日は9 / 12だ」

Q 特徴は？

「以前は金髪だったが、颯さんに助けられて黒に染め直した。髪は前は縛っていたが今では腰のあたりまで伸びているぞ」

Q 元不良と聞いていますが？

「そうだな、元つてより夏休み前まで・・・だな」

Q 何故やめたのですか？

「それはもう。颯さんと出会ってからですよ！！ 自分 / 人生が180。変わりました」

Q 颯さんのおかげで？

「はい。あの方は自分よ強いと言ってくれました。女で弱い僕を」

Q 不良の頃につけていた眼帯は何故？

「あの頃は、とにかく強いことをアピールしないといけませんからねえ」

Q 前に言っていた颯さんが昔はどうとかって？

「それは言えません。颯さんが言うまで」

Q そうですか。では颯さんの事をどう思いますか？

「それはもう、神様ですよ。僕を救ってくれた。言わば女神っ！！」

Q 颯さんは男ですが？

「そうでした。失敬、では」

考える時間が長いですね。

もう30分も経っています。

「　　うううん。わかりませんね。神としか言いようがない」

ではそれで。

Q 最後に一言

「颯さんを解散部のみんなを傷つける奴は僕が許さないぞ」

ありがとうございます。

次回は蘭 颯の双子の妹にしてゲーマーの蘭 真冬さんです。

自己紹介 蘭 真冬 Araragi Mafuyu

「真冬ですか？ わかりました。では一旦セーブポイントまで待ってください」

Q 名前と学年とクラス

「あらい まふゆ 蘭 真冬です。2 学年 2 - F 所属です」

Q 身長 体重 その他

「身長は 1 5 4 c m 体重は知りません 誕生日はお兄ちゃんと一緒です」

Q 特徴は？

「真冬は色白で金の髪がよく輝いてい見えるとお兄ちゃんに言われます。」

ピン止めなんかも可愛いとお兄ちゃんに言われます」

Q ゲーマーって本当？

「はい、ゲーマーです。1 日 2 0 時間はやっています」

Q 残りの 4 時間は睡眠ですか？

「いえ、残りの 4 時間はお兄ちゃんと遊ぶ時間です」

Q それじゃあ寝ているのは？

「自失、数十分です。でも真冬はよく体を壊すのでその時はいつもより余計に寝ています」

Q 颯さん……お兄ちゃんの事はどう思っている？

「お兄ちゃんの事ですか？ お兄ちゃんはお母さんがいない家をきちつと管理してくれている凄い人です。

感動です。感激です。真冬、お兄ちゃんが大好きです」

Q それは兄妹としてですか？

「……それはわかりません。お兄ちゃんのことを考えるとゲームをやっている面白くありません」

Q ブラコン？

「……そうかもしれませんね。でも、たった1人の兄妹を大事にするのは辺り前だと思います。

そんなことを言っているのは実際に兄妹のいない人が言っているにすぎません」

Q 颯さんも同じような事を言っていました。

「当たり前です。真冬とお兄ちゃんは双子の兄妹ですから」

Q 最後に1言

「私は解散部のメンバーでもなければ、お兄ちゃんと恋も出来ない

人です。

ですが、真冬は諦めません。絶対にお兄ちゃんを振り向かせて見せます」

ありがとうございます。

これで現時点のキャラ紹介を終わります。

挿絵ダメでした・・・

作者

すいません。

自己紹介に合わせて挿絵も後悔しようと思ったんですが

あまりに作者の絵のヘタ具合ときたらw

誰かー

挿絵書いてくれー

と、なにげに募集をかけてみる

ぜひ、書いてもいいですよって人は感想の所に

『自分、書きます。』みたいな事を書いて欲しいです・・・

作者は絵がほんとヘタ。

なんか、すいません。

感想も待っています。

いよいよ次回は

謎の3年生と新入部員です。

ってか、この侵入部員も名前ちよつとでてきたけどねw

イラスト1枚目

颯 「なに？ 俺のイラストが書けたのか！？」

作者「書きました。書かせていただきました。」

ずっと、今週は午前授業だったので家に帰って書いてました」

颯 「恐るべき、引きこもりぶりだな・・・」

作者「ねえw」

颯 「さっそく、紹介だ。これが俺の顔である」

>i333306—3884<

作者「どう？」

颯 「どう？っていわれても毎日、鏡で見るから・・・」

作者「そうだったねw」

颯 「ぜひ、これを見ている読者様に感想をいただきたいものだ」

作者「自分はあまり絵がうまくないので・・・アドバイスをいただきたい」

颯 「では、引き続き解散部をよろしく」

作者「最新話 新キャラっ！！は明日10/22日 更新予定」

颯 「おっ！？ 更新速いな」

作者「ええ・・・最近は変えるのが速いしバイトもないのでw」

颯 「将来の夢はニートか？」

作者「さー、それは数年後のお楽しみっ！！」

新キャラっ!!

夏休み明け初日

「やばい!!」

今、俺は 走っている。

街中を。

全力で

理由はもちろん。

遅刻

現在の時刻 A m 8 : 2 0

「やべえ 遅刻まで後、10分じゃねえか!! なんて瑞希も真冬も起こしてくんねえんだよ」

いつもなら誰かしら起こしてくれるのに……

くっそ、恨んでやるぜ。目覚まし時計

「だらっしやあああ」

とにかく走る。

ただそれだけだった。

「ど、ど、ど、ど、ど、ど、どうしよう」

【待てよ、まゆっち。どうした落ち着け】

「ち、ち、ち、ち、ち、ち、遅刻ですよ。これはもう大変です」

【だから落ち着けてまだ10分もあるじゃねえか】

「違いますよ。早く行かないと先輩方に『お前1年のくせによく遅刻なんてするな』って

怒られちゃいますって」

【それはお前の妄想だ……。ってか、1ついいかまゆっち？】

「はい、なんでしょうか？ シロ熊くん？」

【そこに人が倒れてっぞ】

「えええええ！！！！ どこですか？ 救急車？ いえ、消防車？
おいshこいjsd」

【落ち着け、まずは安否を確認しろ】

「ぢjvhそ はい、そうでした。・・・」

ゆっくりと近づいて肩をそっと叩く。

「だ、だ、大丈夫・・・ですかあ？」

「・・・・・・腹減った」

ぎゅるるるううううつうううと倒れた人から音がした。

「あ、あの・・・これよかったです・・・」

そういつて渡したのは菓子パン。

お昼に食べようと思っていたけれど・・・

「い、いや・・・大丈夫だ。ありがとう……」

「・・・そうなんですか？ でも、一樣」

「それより、いいのかい？ もう学校まで時間ないけど・・・」

「え　　。ど、ど、ど、ど、ど、ど、どうしましょうか!!」

夏休み明け初日から遅刻とか、不良と思われるてしまいます」

あたふたと動き回る。

すると

足を挫き、地面に倒れこんだ。

倒れていた人はとつさに滑り込み、彼女の下へ移動。
下敷きになったのである。

「い、ったた　　あ、あ、の、も、も、も、申し訳ございません」

立ち上がってお辞儀をしようとするが

「い………った」

「大丈夫か？ あんた、足挫いてるじゃないか」

「いえ、このくらい　ッ」

「止めとけ、足が青くなってる」

「で、でもそれでは学校が……キャッ」

「大丈夫だ。俺もその学校の生徒だしな」

少年は彼女をいわゆるお姫様抱っこし、学校へと歩き出した。

「す、す、すいません。見ず知らずの方に抱きかかえてもらうなんて……」

私、重いでしょう……」

「いいや、君ほど軽い女子はいないと思うよ。ほら、さっき倒れた時に落ちた

ぬいぐるみ　」

「あ、ありがとうございます」

「で、君の名前は？」

「わ、わ、私は　まゆずみ　黛……」

「黛？ そりゃあ、たいそうな苗字だな。でも、長いから……君はまゆっちって呼ぶよ」

「まゆっち！？」

「嫌だった？」

「い、い、いえ……！　滅相もございません」

「それはよかった。」

彼女は思った。

こんなに優しい男性に出会ったことはない　と。

そして急に抱きかかえられて胸がドキドキしてきた　と。

何故か、顔を見えないほど緊張してしまう　と。

それがいったい何なのかはわからない　と。

「まゆっちって1年生だね？」

「あ、はい。私は1年A組に所属しています」
「1年A組か・・・」

少年はまだ知らない。

彼女が唯一の1年生部員の友達であることを

「どうしたの？ さっきから顔が赤いけど……もしかして、風邪でも引いているのか？」

「い、い、い、い、い、い、え。なんでも、ありません」
「そう？　ならいいけど」

少年は疑問に思いながらも黙々と学校へ歩いていく。

もう遅刻は免れないが、1人のしかも下級生の女の子を見捨てるほど少年は薄情な人間ではない。

中学の頃はいざ知らず　現在の少年はまじめでしっかりとした不幸少年なのである。

「ほら、学校に着いたよ」

「あ、あ、あ、あ、りがとう。ご、ご、ご、ご、ご、ざいます」

「いや、お礼をいられることはないよ。俺はただ当たり前の事を
しただけさ」

「いえ、本当にありがとうございました」

「本当なら1回保健室に行った方がいいと思うんだけど」

「いいえ、本当に大丈夫です。ありがとうございます」

そういつて、彼女は挫いた足を補いつつ、1年生のフロアに去って行った。

「まゆっちか……。やべっ！！俺も遅刻だ」

少年もまた、2学年のフロアに向かって走っていくのであった。

放課後
いつもの解散部。

「それにしても災難だったな、颯」

「そうだよ。遅刻するわ、担任にこっぴどく怒られるわ。罰として反省文10枚って

「どういふ神経してんだ、あのババア」

俺達 2 - A組 担任

いちかわ
市川 稲穂 いなほ

24歳 独身

見た目は可愛いものの、中身が最悪。とにかく、彼氏に振られるもんだから男子には超
厳しい。

「……ったく、人の恋路を俺達のせいにするなよな」
ブツブツと反省文（3枚目）を書いていると、

続々と部員がやって来た。

「おお、颯やっっているなあ」

「うっせえ」

「颯くん遅刻大魔王だあ」

「いつの時代の大魔王だ！！ それにお前が起こしに来ないからだろ！！」

「颯さん、なんなら僕が毎朝起こしに行きましょうか？」

「いい、なんか怖い」

「颯さん、お手伝いいたしましょうか？」

「いいや、後7枚だから大丈夫だ」

「颯くん、理子にも慰めの言葉を」

「お前は少し黙っとけ！！」

ワイワイと会話を繰り広げれる。

まったく反省文（3枚目 第2行）が進まない。

これじゃあ、帰るのは深夜になってしまいかも……。

きゃー、怖い。

「そつえば、颯くん今日は紹介したい人がいるんです」

「お！？　なんだ理子？　結婚でもするんか？　おめでとつご祝儀は12円くらいかな……」

「結婚は颯くんとなります。それにご祝儀が12円って少な！！半端っ！！　違いますよ」

そついつて理子は誰かを手招きしてきた。

おどおどしながらもその少女は解散部の中へ入ってくる。

「あ、あ、あ、の　朝はありがとうございます」

「ああ　たしか　まゆっち？」

「は、はい。まゆっちです……」

「なに、なに？　お前らどんな関係？」

炬がそう言った途端、瑞希の背後から禍々しいオーラが発生した。きゃー、怖い……あれこのネタどこかでもやったな。

「ふふふふ　颯くんに近づく女は全員クロス」

ありとあらゆる文房具を取りだし、攻撃態勢に入る。

お前はケ　さんか！！

「止めろ、瑞希」

「はい、止めました」

「「「はやっ！！！」」」

数人の声がだぶった。

それだけ驚いたってことか・・・。

「この子は黛 百合ちゃんです。みんなからは『まゆっち』って言われています」

「ああ、それでまゆっちねえ・・・で、颯は知ってたのか？」

「いや、まったく」

・・・・・・・・・・。

「え？ 何故、そこで全員黙るんだ？」

俺は反省文（3枚目 丁度半分）を書きながらそう言った。

「いや、颯さんってどうにも勘が良すぎるっていつか・・・」

「高性能メカみたいなものですかね」

「そうだな」

うん、うんと頷く部員。

「で、今日はどういったご用件で？」

「いえ・・・私、実はここの部員なんです」

・・・・・・・・・・。ん？ 今なんと

「もう1回言ってくれ」

「私、この解散部の部員なんです」

[illegible]

夜と炬以外は大絶叫。

「そういえばそうだったな」

「僕は始めから知ってたよー」

そうフローした。

「改めまして、**黛百合**と申します。1年A組所属。趣味は」

「妄想だね」

「ちよつと 理子ちゃん」

「大丈夫、この人達は変な人しかいないから」

「お前も十分変な人だけどな」

「可笑しいですね、今変な声が幻聴ですかね」

「自分に不都合な事はカットされるのか、こいつは!!」

「聞いてください、いつもは『ああ、私の王子様。いつ会われるのかしら』とか

メルヘンチックな事を言っている人なのに」

「ええ！！ 驚愕！！」

「もう理子ちゃん。怒りますよ」

「今日はやっと見つけた運命の人だって。それがまさか」

全員は一斉に同じ方向を向く。

「ん？ みんなどうした？」

颯の所を。

「いえ、なんでも」

黛は顔を赤らめ、そわそわと他の部員はため息を
ちなみに瑞希は帰りました ここ重要！！

【まったく、大変なことになりそうだぜ】

「今の声誰？」

こうして、俺達の解散部 second season 開始の合
図と共に

颯よりも先に部員となつた解散部の先輩

百合が本格的に部活をするようになった

理由は簡単

王子様いるから

みんなは同時にため息を付くと各々の作業に戻った。

ちなみに颯の反省文は未だ5枚目である。

「じ、じ、次回予告つ！！」

黛 「い、い、い、い、い、いでしょ？　こんなか下っ端の私が
こんなことをやってる……」

理子「大丈夫です、いつもなら下っ端の颯くんがやっているの」

「誰が下っ端じゃああああ」

黛 「ひい！！ す、すいません。このような場所に来てしまつて
すいません」

理子「大丈夫ですって、あの人は今、反省文に追われてますから」

「俺、次回でねえから、その辺よろしく」

(反省文 5枚目半分)

理子「わかりました。では、次回は理子視点からで」

「いや、お前してんだと嫌な氣しかしないから3人称でいいよ」

理子「えー、そんなぁ・・・」

黛「と、ということで 次回 私、羽ばたきますっ！！」

？「私はまだでてこないのかー」

颯「アナタはもう少し後です。」

私、羽ばたきます!! (前書き)

あえての続編。

まゆっちが来た後の話。

私、羽ばたきます！！

と、いう事で今回限りにつき、影ナレ風に3人称。

颯が反省文（6枚目突入寸前）を書いている頃。

【まったく、世話の焼ける奴らだぜ】

「誰！？ 今の誰？」

「い、い、い、い、まのは私の腰にいる」

【シロ熊くんだぜ！！】

「うわーすげーよ。ぬいぐるみが喋ってるぜ」

「炬、テンションあがり過ぎだ」

「す、す、すいません」

「いや、まゆっちには言ってないが・・・」

「それにしても、喋る機能があるぬいぐるみなんてまだ私の会社でも開発されてませんわ。」

もしかして、理子さんが？」

「いえ、理子は何も。シロ熊くんは精霊が憑りついて話している
と言う設定らしいです」

「せって もごもこ」

炬は夜に口をふさがれそのまま連行されていった。

そして理子はまゆっちを警戒しながら、他の部員に話した。

「このシロ熊くんはいわばまゆっちの本音みたいなものです。

いつもおどおどしていて、中々本心が言えないものですから。こういう機会ですか

話せないんですよ」

「まるほど、それならシロ熊くんの声が妙にまゆっちに似ていたことも裏づけがとれる」

「何、何？ せって」

「こいつには教えん方がいいな。すぐに口を開く」

「あ、あの・・・どうされたんですか？」

【おう、おう、おう。俺とまゆっちに隠し事かい？ なんだい、なんだい！！】

「いえ、理子達はヒマだったもので何か遊ぼうかと思ったんですよ」

理子はそのいうと、部屋の隅に置いてある、何か危ない予感しかない物を取り出した。

颯は相変わらず反省文（6枚目序盤）を熱心に書き連ねている。

「では、これをやりましょう」

「なんだ、これは？」

「これはですね。簡単に言うと空を飛べるマシンです」

「理子ちゃんって発明家って聞いてましたが、本当に作っているんですね」

「理子の発明品はどれも2流だけだな」

「あのゲーム面白かったな、またやりたいよ」

「なんですか？ ゲームって」

「いや、あれを説明すると日が暮れそうだ」

「とりあえず、この部屋だと天上が当たっていしまうので外へ行きましょう」

「待った!!」

声を上げたのは親指と小指で紙を持ち、人差し指と中指で反省文を書いている颯であった。

「俺も行く」

「なんだ颯、その書き方。気持ちわるっ!!」

「颯くん、気持ち悪い持ち方です。でも理子はそこも愛していますから」

「は、は、颯さん。凄い持ち方ですね」

【ひゃっはー、笑っちゃうぜ】

「颯さん、カッコいいです!!」

「凄いすわ、颯さん」

「・・・、総称すると俺、凄い気持ち悪い人なのか？」

・・・・・・。

上手い具合にくっ付けた颯であった。

外（中庭）

「中庭、久しぶりに来たけどここも広いな・・・」

「まあ、この学校自体大きいですから」

颯は片手で紙を持ち、片手でペンを持つ体制に戻した。
颯と芹菜を先頭にし一向は中庭を目指していた。

ちなみにここは中庭へ続く廊下。
まだ中庭ではありませんよー。

「そういえば、ここで理子はまゆつちと出会いましたっけ？」

「そ、そ、そうですね　懐かしいです」

「お前ら中学校から同じじゃねえんだ」

「はい、理子は別の中学から編入してきました」

「私は中学校からです・・・」

トコトコ歩く。

何故か異様に長いのは気のせい。

「そういえば炬と夜も中学からだよな」

「うん、僕は夜と　中2からだから・・・何年だ？」

「・・・こいつはやはりバカだな。4年だ、4年」

「そう4年。4年かん同じクラスだね」

「それは凄い運命でらっしゃいますね」

「いや、まゆつちよ聞いてくれ。こいつは中2の時、なんの前触れもなく

1人だった私に話しかけてきたんだぞ。もし、こいつがいなかったら私は1人だったが

とにかくしつこかった。なんかあの頃は　ウザかった」

「ええ！？　ウザかったの！！」

「あ　あの頃ではないな」

「・・・よかった」

「現在進行形だな」

「うわぁぁん」

夜の毒舌を浴びせられた炬は泣くように（ってか泣いていましたw）

中庭へ走って行った。

「い、い、いいんでしょうか。練馬先輩、泣いていましたけど・・・」

「いいんだよ、あいつはバカだから3分もすれば忘れるさ」

【案外、優しいんだな日笠さんって】

「バ、バカを言うな。あいつは　ただうるさくて　そう、うるさい奴だ」

これは、これは・・・。

今、全員がニヤリと夜の弱点　欠点　本音を聞いた瞬間でした。

それから約5分近く中庭へ続く道へと歩いていく一向。

まだ、着かないんかい！！　という、声が次第に薄れていく頃。

炬と再会し、なんともなく普通にみんなと話し合う炬。

やはり、バカはバカであるということ。

中庭へ到着です。

「やっと着きました。もう理子は帰りたい気分です」

「速いぜ！！　お楽しみはこれからだろ」

「まあ、そうですね・・・正直、理子にはもう体力はありません」

「そ、それじゃあ、何か飲み物でも買ってきてみましょうか？」

「いいえ、大丈夫です。ありがとうございます、まゆっち」

少し照れるまゆっち。

理子もつられて照れてしまう。
女の子の友情ってやつです。

「では始めましょう。実験台は 颯くん、どうですか？」

「あ？ 俺は やりたいのは山々だけど、反省文がなあ・・・」

ワザとらしく口笛を吹く颯。

どうやら、反省文を口実に実験台を避けたいようです。

「はい、はい！！ 僕がやる やりたいDeath」

「何故、そこで死？ バカな練馬先輩からそんな言葉が！！」

そんな時もあります。

はい

そんなこんなで、実験開始。

「うおおお 浮いた 浮いた。スゲー」

「凄いな、本当に浮いているぞ」

「凄いです理子ちゃん！！ 世紀の発明じゃないですか！！」

「いや、いや、まゆっち。この作品には大きな欠点があります」

「え・・・」

「それは浮いたとしても、後ろにエンジンを積んでませんから動けません」

・・・。。。

一同沈黙（炬以外）

「うをおお、スゲー でも・・・いくら・・・走っても・・・動かないけど・・・」

「まあ、失敗作ですよ。これが成功していたらノーベル賞もんですけどね」

「そんなに、すげえのかよ!!」

思わず会話に入ってきて来てしまった颯。
それだけ凄い事です。

結局、結論から言うとすれば失敗。
無論、欠点から言うとなれば未来性？

な、作品でした。

一向はだらだらと解散部の部室へ戻っていくと、中には

ガチャ

「疲れた。異様に疲れた」

「もうあの中庭にはいきませんわね」

「そうか？ 本気だせば2分で行けるぜ!!」

「それは練馬先輩限定ですから」

「あ、あの・・・誰かいますよ？」

まゆつちの言葉でみんなは正面を向く。
すると、知らない人が

「ハロー みなさんが解散部のメンバーさん？」

「・・・どちらか知りませんが、そのネクタイからして3年生ですか？」

「おうよ！！ 私は通称 はーちゃん。3年生で湊の親友だ！！」

名前名乗るときに通称とか使う？

みんなが思ったことです。

「それでその・・・はーちゃんさん？ が」

「いや、はーちゃんでもいいから。はーちゃんさんとか笑っちゃうでしょ」

「 はーちゃんが来た所悪いですけど、湊さんはいませんか？ 」

「みなつちは消えたぜ！！」

「そんな蒸発しました見ないなと言うなや炬」

はーちゃんは爆笑。

腹押さえて、ケタケタ笑っている。

背景にそう書いてあるもん。

「いいや、今回は湊に用はない。用があるのは そう。君だ」

はーちゃんが指を差した先にいたのは

「わ、私ですか？」

まゆつちであつた。

「いや、違くて、君の後ろに居る君だ」

いや、どっちの君だよ。

颯は思った。

「はぁ・・・俺になんのようですか？」

颯は反省文（8枚目後半）を書きながら（廊下の壁で書いている）言った。

「ほー、君が蘭 颯くんかぁ・・・なるほど、いい男だ」

そういつてはーちゃんは颯の近くへより、じろじろ見始めた。

颯はしかめっ面をしながらも黙々と反省文へ取り掛かっていく

「で、颯がどうかしたんですか？」

「ん や。どうでも。ただ、見てみたかったんだ。（湊が惚れた男をね）」

最後の部分は誰しもが聞こえず、頭の上に？を付けていた。

「あー！！ はーちゃんいたー！！」

「げー！！ 湊」

向こうの廊下から、湊が寄ってくる。

まだはーちゃんの後ろに颯がいる事に気づいていない。

「もう、はーちゃん 今日是用事があるから先に帰るって言ったけどこんな所にいたー！！」

「ご、ごめんって湊」

いつになく強気の湊。

それだけ、長い付き合いってことです。

それともただ怒っているだけかもしれません。

「はー!!」

何かに気づいた様子。

「みなさん、どうも」

ぺこぺことお辞儀をする湊。

一瞬で腰が低くなりました。

「こんにちは湊さん」

「やつほーみなっちー!!」

「こ、この方が湊先輩・・・」

まゆつちと湊は初対面。

しかし、それだけにビビッと電撃が走った。

この人　もしかして

両者がそう思っていることを颯は知らない。

いや、知っていたら逆に怖いけど・・・

「どうも、私　3年・D組の菊池　湊といます」

「ご、ご、ご丁寧にどうもありがとうございます。私は1・A組
黛　百合と申します」

互いに見つめ合う2人。

傍から見れば、仲が良くなりそうだが　この2人は思った。
この人とはライバルになりそうだと。

理子さん（ちゃん）とはライバルだが、あの人は表に出し過ぎだ。
でも私は影で応援するタイプである。

いずれ颯さん（くん）を振り向かせて見せる

心の中の回想と思われる結構です。

ふと湊は下を見た。
すると、颯を見つけた。
あの時の事を思い出す。

颯が上を向いた。
目が合い互いに目を逸らした。
互いの頬が赤くなる。
こそばゆくなつて頬を掻く颯。
あんな思い切ったことをしてしまったと恥ずかしくなる湊。

それをみて不思議に首を傾げる部員。
ニヤニヤするはーちゃん。

そして1言。

「今日はこの辺でし、失礼します。はーちゃん行こうっ!!」

「はいよー、じゃあね颯くん」

風の如くだっけ？

そう例えるというのかな？

バカな炬はそう思った。

ああ、これは・・・

何か納得した夜。

あら、あら、困りましたわね。

と、なにを困ったのか不明な芹菜。

早く、颯くんに抱きつきたいです。

下心丸出しの理子。

いつかこの人に　私の気持ちを

下にいる颯を眺めるまゆっち。

黙々と反省文を書く、颯。

なんやかんやで今日も平和な解散部であった。

颯 「次回予告!!」

真冬 「ご無沙汰です。お兄ちゃんの妹の真冬です」

颯 「久しぶりだな真冬。何日家に引きこもってたんだ？」

真冬 「2日です。いよいよ明日、ゲームの大会があるので!!」

颯 「そうだったっけ？ 明日は休みだから見に行くかな」

真冬 「そうですか!! お兄ちゃんが来てくれるなら100人力です」

颯 「解散部のみんなも誘うかな・・・」

真冬 「・・・」

颯 「どうしたんだ!! 真冬？」

真冬 「真冬はお兄ちゃんに幻滅しました。

私、引きこもるので部屋に入ってこないでください」

颯 「謎のツンデレ!!」

真冬 「ピコピコ（電子音）」

颯 「もう、いいや。明日の準備でもするかな」

真冬 「次回、真冬 羽ばたきますっ!!」

颯 「いや、それ今回だから」

颯 & a m p ; 真冬 「次回 真冬のゲーム大会」

真冬 「お兄ちゃんなんて、ゴミ箱で暮らせばいいんですよ」

颯 「俺がゴミ箱で暮らしたらお前は3日で廃人になる・・・あ、もうなってるか」

真冬のゲーム大会（前書き）

最近FFと残りの小説を書いていて
解散部の話が思いつかない。

どうしよう・・・

あ、本編始まります。

真冬のゲーム大会

9月 25日

都内某所で行われるゲーム大会。

「と、いうことでやってまいりました。解散部inゲーム会場
!!!!」

「いええい!!!!」

理子と炬が声を合わせるようにテンションを上げてきた。

「何故、私はここにいる・・・」

「あれは」

「面白い物ばかりですね」

「こ、こ、こんな所へ来てしまつて私いいのでしょうか？」

【いんじゃない？ まゆっちかつ飛ばせー】

「そ、そ、そんな。ご謙遜を・・・」

色々と文句を言っている部員。

その中には1人ゲーム機から目を離さない人物がいた。

その名は蘭あいらいり 真冬まふゆ

金髪少女に病弱キャラで尚且つ俺の妹でもある。

尚且つ 　　ってこの時に使う言葉じゃねえな。

「なあ颯？」

「あ、なんだよ」

夜が近くで話しかけてきた。

「真冬はこの前会ったよりも少し表情が怖くないか？」

「ああ、それはこれから始まるゲーム大会に向けて神経集中
してるからだよ」

「なるほど」

そついうと夜は何処かへ行った。

「颯くん」

「理子、今度はなんだ？」

「今度って理子はまだ1回目です。おほん おほん。颯くん

」

「あ？　なんだよ」

「ここ広いですね」

「普通の感想！！」

案外一般人より知識が低かったりします。
俺達は。

そんなこんなで始まりましたゲーム大会。

まずは主催者のとある会社の社長さんの挨拶。

「ええ、SEO Aの社長の蘭 ひたぎさんで す」
司会進行役の人が名前を言うと、蘭 ひたぎ 俺の母親が登場した。

「おい、颯!! あれ、お前のお母さんか？」

「ああ、言ってなかったつけ？ うちの母親は社長だけど」

「「えええ!!!」」

解散部全員で驚いた様子。

まあ、教えてなかったけれど・・・

「お前凄いな」

「じゃ、じゃあお前にもああ言う才能があるのか？」

「いや、俺にはまったく父親似だ。母親に似たのは あそこでゲームやってる真冬さ」

「へー、颯くんの母親さんってすごいんですね。ぜひ今後、会ってみたいです」

「あ、でも月1で帰ってくるかないかだからなあ」

「そうではなくて・・・」

理子が言い掛けた所で、数人の背後から禍々しいオーラが!!
俺は気づいていなかった。

「絶対に、」

「颯くんの、」

「母親様に」

「「「ごあいさつしなくては!!!」」」

約3人息ぴったしで言い放った。

俺はそれを軽く聞き流し、母親である社長の話を適当に聞いていた。

「それでは始めましょう。」

司会進行の合図で会場は大盛り上がり、ついにゲーム大会が始まったのである。

ここからは、ダイジエスト風に。

1 回戦 真冬 勝利

2、3 回戦も余裕で勝利

準々決勝では前々大会2位の奴との勝負

呆気なく勝利 だって全部優勝してるもの。

準決勝は前回大会2位の覇者。

前回大会では真冬が僅差で勝利、危なかったと後に語っていた。

結果は、いい勝負。またもや僅差で勝利。

いよいよ 決勝戦。

あれ、いいのかな。

もうお話終わる気がするけど・・・

「では、真冬行ってきます」

そういつて真冬は俺達の前から去って行った。

「それにしても凄いですね真冬さんは」

【カッコいいな、真冬先輩は】

「そうですね、理子、真冬さんのこと改めて凄いと確信します」
「いや、いままで確信してんかったのかよ」

いよいよ決勝戦。

相手はルーキー

今回初出場でなんと決勝進出。

期待の新人である。

「赤コーナああああ 3連覇中の蘭 真冬ううう」

いや、何故プロレス風？

「青コーナああああ 期待の新人 ヲ シンジュううう」

絶対偽名だあああああ！！

あ、ちなみに新人は見た目日本人です。
たぶん、ハーフじゃないと思います。

「真冬のこの手でアナタの幻想を砕きます」

パクリiiiiiii!!

「cdソヴfhソチjオ」

何言ってるかわからねえええ!!!

会場中が共鳴し合った瞬間でした。

結果は、あっけなく真冬の勝利。

あ、オチとかないですよ。

新人くんが新しいキャラとかそういう設定は在りません。

「いやあ、今回も白熱しました」

「よくやったな、真冬」

俺は自然と真冬の頭を撫でる。
えへへーと声を出しながら嬉しがっている真冬。

「あれだな。」

「そうだな」

「やっぱり、颯くんはロリコンでした」

「ああ・・・颯くん」

「は、は、はやてさんはロリコンなんですかつー!!」

【なんじゃそりゃ】

ガヤガヤと前方の部員が言っている。

その辺は聞かなかったことにしておいて

「お兄ちゃん!!」

「ん？　なんだ、真冬？」

「真冬は優勝しました。なので1つお願いを聞いてください」

「「ええええ!!!!」」

部員絶叫。

「あ、いんじゃないか？」

「颯くん、それは」

「え？　何故に。いいじゃないか1つや2つ」

「じゃあその効果、理子にも」

「お前は速攻断る」

「え　ずるいです」

頬を膨らませる理子。

飽きれる俺。

ワクワクの真冬。

「じゃ　じゃあ　」

真冬が、言おうとした時、
俺は誰かとすれ違った。

「よお、久しぶりだな。颯くん」

その言葉を聞き、すぐさま後ろを振り向いたが人込みの中に消えてしまった。

「どうしたんですかお兄ちゃん？」

「いいや　なんでもない」

「ですから、理子の願いを　」

「断固拒否する」

「だったら僕のを」

「お前はなんか怖い気がする」

「酷いですよー」

「ははあはは」

みんなで笑って、今日の大会は真冬の優勝で幕を閉じた。

あの声 あを感じ まさか・・・な。

俺はそんな思いをはせながら、少し離れた部員の元へ1人、走っていくのであった。

『おまけ』

「お兄ちゃん」

「ん？ なんだ、真冬」

「お願い発動します！！」

「はい、どうぞ」

「・・・・・・・・。お風呂にい 」

「断固拒否する」

「え いいじゃないですか。お願いですよ」

「嫌だ！！ なんで俺が妹とこんな歳になってまで一緒に風呂に入らねえと行けねえんだよ」

「いいじゃないですか こんなに色白でキレイな女の子他にいないですよ」

「妹以外だったらな。妹は恋愛感情には入らん たぶん」

「あ、お兄ちゃん今、最後に何か言いました」

「ば・・・言つてねえって。」

「うそです。ではここでお願いを発動します」

「お前はどこまでも追い回すな」

「それが蘭 真冬だからです」

「く・・・自分の妹と認めたくない 」

「では お風呂は諦めるとして 今夜は一緒に寝るってことで」

「あ、それならいいぞ」

「えー!! いいんですか!!!!」

「ああ」

「じゃ、じゃあ楽しみに待っています。ひゃっほ」

そういうと、真冬は階段を駆け上がり自室へと帰って行った。

「『一緒に寝る』だもんな。同じ布団やベッドで寝るなんて1言も言われてないからこれなら、安心だ」

俺はそうへりくつを考えながら、自室へと戻っていくのであった。

結局、寝る時になって真冬からの大ブーイング

俺は構わず、布団を敷いて寝た!!

しかし・・・起きたら何故か同じ布団で寝てました。

はぁ・・・今日も愉快的な1日になりますように・・・。

颯 「次回予告」

瑞希「おは、約3話振りの登場だよ」

颯「げ・・・」

瑞希「なにかな？　なにかな？　もしかして、今日の真冬ちゃんと同じ布団で寝ていたこと

怒ってる？　って思ってるのかな？」

颯「お前の洞察力　半端ね」

瑞希「大丈夫、私はそんな事じゃ怒らないから」

颯「いや、俺の周りに女子がいること言い風に思ってたねえだろ」

瑞希「今回は他の女子には手を出さない　代わりに、颯くんに手を出す」

颯「んなつ！！　おい、瑞希！！　手を外せなんだこの手錠。前よりすごくなってる！！」

瑞希「これはね、本場の拷問の時に使われていた手錠なんだよっ！！」

颯「いや、そんなよい子は真似しないでね、みたいな顔しても・・・」

瑞希「だから」

颯「きゃ　怖い。やばい、目が・・・目がマジだ！！　いた……なんだこの手錠。

先端に針が付いてる。痛い！！　地味に痛い！！」

瑞希「ふふふ・・・もう離さない」

真冬「次回　銀髪の少年。颯の過去を知る者？」

颯「おい、真冬起きているんなら助け　ああああああああ」

銀髪の少年。颯の過去を知る者

「あ、今回も終わった!!」
「そうだな」

ここは解散部。

残念な感じを持つ元たちが集まる部活。

「今回も、下から4位だったよ」
「また、練馬先輩は生粋のバ力ですね」
「おい、理子・炬も一様『先輩』だ。バ力ではなくアホにしておけ」
「わかりました、夜先輩!! アホですね」
「2人も結局悪口ですが・・・」

1年の理子

2年の颯、夜、炬、

3年の湊さん

現在、解散部部室にて、総合テストのお話。

「で、颯は今回何位だったんだ？」
「あ？ 俺、今日遅刻してきたから結果見えてねえんだよな。ちょっと行ってくるわ」
「では、私も」
「そうですか？ では行きましょう湊さん」
「あ、はい!!」

そっつい、俺と湊さんは部室を出て行った。

「理子も後をこっそりつけたと思います」

「止めておけ、湊先輩が怒るぞ」

「まったく、颯って奴は」

夜と炬は何を察したのか

それを知ることになるのは随分と先。

颯は気づいていない。

玄関の正面。

それぞれの学年が行き来する場所にでかかと書かれている学年順位
この学校は特殊で1位から最下位までしっかりと掲載されている。
それと、教科別順位も掲載されている。

そういえば、あの時。

颯はすっかりと忘れていた。

夏休み、詳しく言くと4話くらい前の病院でのことを・・・

あれ以来、なにかと湊さんと話す機会がなかったからなあ
あれはきつと誤って足を滑らせたときに起こってしまった
『事故』だ。うん絶対『事故』だ。

「　　くん。」

「あ、はい。なんでしょう?」

「ありましたよ。颯くんは　　10位ですね」

「10位か・・・」

今回は勉強あまりできなかったからなあと、優秀な自分をアピール
してみる。

あ、すいません。
心の底からすいません。

「教科別は？」

「いえ、俺今回は平均的なので 部室に帰りましょうか」
「そうですか。」

簡単に眺めて帰ろうと、教科別とクラス順位を眺めながら帰ると

1人 ここにはいないはずの名前が・・・。

「颯くん。どうしたの？」

「いえ、ただ知った名前がいたもので」

「ここにいる人達は同じ生徒なんだから知ってるはずでしょ？」
「いえ、ずっと 小学校から知っている奴なんでね」

「湊さん、少し用事が出来ました。みんなには帰ったと言っておい
てください」

「え・・・あ、わかりました」

「では また、明日」

そういつて俺は急いであるクラスへ走って行った。

「また、明日 。」

悲しい表情をした湊はどこか泣きそうだった。
悲しいことにそういうこともある。
それが人生。

「おい！！ 真冬、いるか？」
「・・・あ、はい なんだ、お兄ちゃんじゃないですか。どうしたんですか？」

真冬の所属するくらすF組。

現在は放課後と合って人も少ないがまあ、数十人はいる。

「あれが蘭さんのお兄さん・・・」

「たしかA組だっけ？」

「カツコいいですわ」

「なんだ、あいつ。頬に傷あるぞ。かつけ 俺もやって見よっかな」

「止めとけ」

そんな会話がいざこざ舞う教室で俺は真冬に近づいて言っ

「おい、なんであいつがこの学校にいること教えなかったんだ？」

「あいつ？ 誰の事ですか？」

「あいつって 」

俺は一步下がって考えた。

そつえば・・・

真冬はあいつのことを全部忘れたんだっけか・・・

「悪い、ならいいや。話は変わるけどこのクラスに転校してきた奴

っているか？」

「どうでしょう。真冬はクラスには関心というより興味がありませんので・・・」

すると3人ぐらいの女子が近づいて来て

「最近転校生なら来ましたよ？」

「本当か!？」

「はい、夏休み明けでしたっけ・・・銀髪が目つきが怖い人」
「そうか・・・ありがとうな」

俺はそういうとクラスをでて、扉の前で1言。

「真冬」

「はい、なんでしょうか？」

「暗くなる前に帰ってこいよ」

「わかりました。その言葉を覚えて置きながら 真冬はFFの新
作をやります」

そういうと画面に帰って行った真冬。

俺はさきほど声を掛けてきた3人の女子達に

「お前達も悪いな」

「え!？ なんのことですか？」

「いや、俺の予想なら。お前達は真冬の為にここにいてることさ。
ありがとう。」

今度、家に来てくれよ。いつも真冬というお礼ってやつだ」

そういうと俺はある場所へと走って行った。

「蘭くん・・・カッコいい」

「一瞬で私達が真冬ちゃんの為にいる事がばれてしまいましたね」

「だって俺達は非公式真冬ちゃんファンクラブの会員だもんな」

場所は屋上。

あ、屋上って意外とはじめてきました。

あ、嘘です。湊さんと会った時も屋上でした。
なんかすいません。

屋上へ着き、辺りを見渡していると上から空気弾が放たれた。

「いたっ!!」

「久し振りだな。蘭 颯くん」

「こちらこそ、久しぶり。柄針 からはり 蓮太くん れんた」

屋上の入り口の上、入口からは視覚となっている所で寝転がっている。
る。

銀髪でくしゃくしゃで瞳が赤く染まり、右手には丁状の杖を持って
いて

左手にはエアガン（その名の通り、空気を圧縮させた銃。改造して
いる為弾がなくとも

打てることが可能）を持っているその人物。

「半年振りだな」

「そうだな。俺はもう見たくもねえけどな」

「おあいにく様、こちらもお前の顔なんて見たきやねえよ」

・・・。

互いの顔を見て、沈黙。

「「ぶ・・・」」

「「あははは」」

2人は笑い出した。

「まじかレータ。なんでこの学校に居るんだよ」

「さな。神様の気まぐれじゃねえノか」

蘭 颯と

柄針 蓮太の出会いは中学時代。

「おい、お前」

「ああ！？ なんだてめえは」

「俺と友達にならねえか？」

「ああ！？ 断るね」

あれは中学1年

地元でも有名な中学校へ進学した俺と真冬は
少しながらも頑張って学園生活を送っていた。

中学時代はけんか、けんかに明け暮れる日々。

別になにもしてないのに、連鎖を生んでどんどん別の中学、高校から不良達がやってくる。

俺って本当に不幸だああ

それはあいつもそうだった。

「柄針 蓮太・・・」

ここが俺とレータの出会い。

颯 「次回予告!!」

蓮太 「なんだ、この場所は？」

颯 「ここは読者に次回の予告をするところだけど？」

蓮太 「じゃあ、なんで俺はここにいるんだ？ 俺は今回初登場だぞ？」

颯 「本編では初めてだけど、俺との友情は長いじゃねえか」

蓮太 「別に好きで付き合ってたわけじゃねえだろ？ たまたま不良

に追っかけられて

それで出会っただけじゃねえか」

颯 「あ、その話。次回で言おうとしたのに
から次回は別の話でいいか」

まあ、今言った

蓮太 「お前、この半年で随分と変わったな」

颯 「そうか？」

蓮太 「ああ、主にその適当具合とか」

颯 「お前は変わってないな」

蓮太 「まあ、それが俺だからな」

颯 「・・・ハイ メイゲン キマシタ」

蓮太 「おい！！ おま…今なんで片言なんだよ！！」

颯 「しらね」

蓮太 「一回、死んでみるか？」

颯 「さーてと、後、どれくらいだ 後、2pか・・・」

蓮太 「さらっと作者情報いれんなよ。今回、本編短かったけど」

颯 「作者的にはこの後に部室でゲームをやりたいんだって」

蓮太 「なんだよ、俺置いてけぼりか？」

颯 「だってお前、群れるの嫌いだろ？」

蓮太 「ま、まあな。ってか俺のキャラぶれてねえか？」

颯 「ぶれてない。ぶれてない」

蓮太 「ああ、だり」

颯 「おい、飽きんなよ。もう閉じるか？」

蓮太 「いんじゃないのか？ 作者もきつと満足だよ」

颯 「次回 トランプ 大貧民？ 大富豪？でもして盛り上がる

」

蓮太 「俺の回まったく関係ねえ

」

あ、次回へは続きませんよ。普通にトランプやります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8983v/>

解散部 The dissolution

2011年11月12日20時41分発行